

UFOと宇宙哲学の研究誌

—日本GAP—

ニューズレター

No. 36

U F O と宇宙哲学の研究誌
日本GAPニューズレター

— 1968 —

第36号目次

予 言 (Ⅱ)	G・A・ハニー	1
ジョージ・アダムスキーの思い出	ルウ・ツインシュターク	6
空想か真実か	チャールズ・ボウエン	10
<写真>月の神秘の孔群		18
ウォーミンスターの調査報告	J・ハーニー//A・シャープ	19
円盤の乗員に救われた瀕死の少女	O・T・フォンテス	22
ヴァレンソルの着陸事件	エメ・ミシェル チャールズ・ボウエン	25
編 集 後 記		36

予 言

(II)

1145(7)
1147
1148

C・A・ハニ一

殆どの歴史家はイスラエルの、失われた十部族、は忘却の彼方へ消え去ったのであって、その最後の運命や滅亡に関しては不明だと今なお言っている。これはもちろん真実ではない。その運命にたいする解答はわかっているし、選ばれた少数の人にはいつも知らされていたのだが、世間一般は知らなかったのであり、今後もおそらくわからないだろう。

新しい時代になるごとにきわめてわずかな知識が前代から伝えられる。数年たてば多くの驚くべき発見が歴史から姿を消し、再発見されない限り永久に消滅する。

この好例は今日の大抵の考古学者に知られていないジェイムズ・チャーチワード大佐の諸発見である。この諸発見が現代の学者の注意をうながしたとき「チャーチワード」という人のことなど聞いたことがない」というわけで相手にされなかった。それからほんの数年たつてチャーチワードの諸発見は大体に世間から消えてしまった。

一 1 一
これと似たような状況は科学と学問のあらゆる分野に存在する。高度に発達した惑星（複数）から来た、指導者、たちによってこの地球上で遂行されている計画の場合にも同様の状況が存在する。加うるに地球上の諸状態が大きな変化を起こしたために、ときと

して計画の延引が必要であった。しかしこの惑星にたいする総合的な計画は暗号で書かれ、時折或る「リーダーたち」か、指導者たちへ伝えられたのであるが、それは暗号によってわれわれに伝えられたのであって、聖書の予言中にある「イスラエルの家」の物語に見出されるのである。イスラエルの家（選ばれた人々）とは或る特殊な運命を遂行するために地球上で生まれたかまたは地球へ連れて来られた人々の特殊なグループを意味する暗号名である。彼らはこの記事の第二章に述べられた、大古の人間の墮落、に出て来る人々である。

この元の「墮落人間」たちには種々の指導者が遣わされていて、これが墮落者たちの出身惑星から来る代表者たちと直接コンタクトしていた。旧約の時代にはこの指導者たちは、予言者、または「神の予言者」と呼ばれていた。後には最大の指導者が他の惑星からこの惑星で生まれかわってイエス・キリストとして知られた。初期の教え（複数）（注：名詞の複数化の概念と記号とを持たぬ日本語は何という非論理的な言語だろう！）が地球人によってゆがめられ、宗教、に変えられたのは実際不幸であるが、このこともすでに予知されていたし、適当な時機が来たときに遂行すべき正しいコースに関して諸計画がたてられたのである。その行動の計画は暗号で書かれて予言者たちに渡されたが、彼らの多くは何が渡されたのか理解しなかった。

第三章で約束したように、この記事ではイスラエルの家とユダの家（ユダヤ人）の最後の運命が書きとどめてある明確な箇所を示すことになっている。それは偏見や無知などで盲目にされていない人ならだれでも今見ることができるのである。たしかに多く

の人々はここで示される諸事実を把握できるほどに進歩しないだろうが、時間を与えるならば結局は理解し始める地点にまで登るだろう。イエスが自分の述べた言葉にたいして人々がそれを受け入れる準備ができる前に殆どの人にわからせないようにしようとして寓話の中で話したように予言類は暗号で隠されているのである。選ばれた少数の人々だけがその意味を知り得るのである。予言類を理解するべきキイは現在まで、「世の終り」の時代まで隠されていたのだ。

大抵の人は知らないけれども、聖書はイスラエルが歴史から消えたときにどこへ行ったかを語っている。このカギとしてサムエル記下七・一〇と歴代志上一七・九は「彼らを植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、これ以上動くことのないようにしよう」と述べている。エレミヤ書三・一一—一二においてわれわれは別なカギを見出す。エレミヤは、イスラエルがユダよりも（ユダヤ人よりも）自分の罪の少ないことを示したと聞かされ、北に向かつて次のように言えと命じられる。「主は言われる。背信のイスラエルよ、帰れ。わたしは怒りの顔をあなたがたに向けたい」ここでイスラエルとユダは注意深く二つの民族に分けられていて、イスラエルは北方に位置しているのである。ホセア書一一・一ではエフライム（イスラエルの一部）が西に向かっていることがわかる。エフライムは東風を追っているからだ。この二つの予言からみてイスラエルは北方と西方にいなければならず、しかもそれ以上動かないで、今日もおそこにすることがわかる。エレミヤ書の三・一八には、最後の時代にはユダの家はイスラエルの家と一緒にあって、北の地から出て「わたしがあなたがたの先祖たちに相続

財産として与えた地」に共に来るとある。

イザヤ書四九・一二には北と西という位置が再び出ている。イザヤ書の第四九章にはイスラエルが第一節において「海沿いの国々よ」と呼ばれ、第三節では「イスラエル」と呼ばれている。またエレミヤ書三一・九—一〇ではイスラエルを「遠い海沿いの地」と言っている。イスラエルは「遠い海沿いの地」にあるばかりでなく、主の言葉によれば「万国のかしら」なのである。イスラエルは「海の中（島々）」、北と西（北西）、万国のかしらと述べられている。読者ももっと確証したければ、次の個所を調べるとよい。詩篇八九・二五、ホセア書一一・八一—一〇、エレミヤ書三一・八、エレミヤ書三〇・二四、三一・一、三一・二—九、イザヤ書四九・三、六、一二。

ヨーロッパの地図をひろげてみると、「聖地」の北西にある唯一の島々はイギリス諸島であることがわかる。更に証明すると、ブリテイッシュ・ネームはヘブライ語に源を発するのである。イスラエルの家は、「聖約の人々」として知られていた。原初ヘブライ語の綴りにおいては母音が与えられなかったし、加うるにヘブライ人はh音を発音しなかった。現代のユダヤ人もh音を発音しない。それは大方の読者が知っているように現代の英国の特色でもある。「聖約の人々」を意味するヘブライ語はブリト・イシュと発音される（聖約がブリトで、人はイシュである）。

イスラエルは新しい名で知られることになり自分の身元がわからなくなるだろうという予言を思い出されたい。アモス書七・一六、新約のローマ人への手紙九・七、ヘブル人への手紙一一・一八では新しい名が与えられている。彼らは「イサクの家」と呼ば

れることになり、イサクの子孫が「イサクの子」と呼ばれるだろうとある。ヘブライ語の綴りでは母音が用いられないので、新しい名は「サクの子(サク・ソンス)」となり、史書類が記しているように「サクソンス」となったのである。

このことはイエール大学のW・ホウルト・イエイツ博士によって確認されている。それによると、サクソンという語は「イサクの子」の接頭辞「イ」を落とすことよってできたものであるという。

英国史を勉強する際にサクソンとノルマンについて読むときはサクソン人がイスラエルの家の一部で、イサクの子であったということを思い起こしていただきたい。

今ここでそれに深入りする余裕がないので、ヨーロッパの北西部とイギリス諸島に見出される別なヘブライ語名を簡単にあげてみよう。失われた十部族の一つである「ダン」はダン、デン、デイン、ドン、ドゥンという形で痕跡をとどめているが、これはすべてヘブライ語から出たものである。スペインではメディン、ア(メディナ)、シドン、ハイア(シドニア)、等がある。アイルランドにはトゥアサ・ダナンズというのがあるが、これは「ダンの種族」を意味する。アイルランドにはヘブライ語から出た地名が沢山ある。ダンズラーフ、ダンサワー、ダンダルク、ダンドラム、ドンエガル、ダングロウ、ロンドン、デリー、デイン、グール、ダンズモア等々。アイルランド名の「ダン」は「裁き人」を意味するが、ヘブライ語名「ダン」も「裁き人」を意味するのである。

ヨーロッパには次のような固有名詞がある。マケドニア、

(マケドニア)、ダーダン、エルス(ダーダネルス)、ダン、ユーブ(ダニユーブ)、ドン、イエブル(ドニエブル)、ドン、イエスター(ドニエスター)、スカン、デイン、アヴィア(スカン、デイン、ヴィア)、デン、マーク(デン、マーク)等がある。デン、マークは「ダンの名残り」を意味する。

イギリスには次の名称がある。ロン、ドン(ロンドン)、ダン、デイー(ダン、デイー)、ダン、カーク(ダン、カーク)、ダン、パー(ダン、パー)、エ、デイン、バラ(エ、デイン、バラ)等。

次のような興味ある事実がワース・スミスの著書「栄光の家(ニューヨーク、ワイズ社版)」に出ている。「だれも知っていないようにアメリカという名は地理学者アメリカ・ヴェスプッチ(注一四五一—一五二。イタリアの探険家)の名にちなんで付けられた。ラテン語ではアメリカはアメリカで、それから出たアメリカは女性形である。アメリカという語の古代ゴート語では「ゴート人はイスラエルであった」アメル・リクといい、今でもドイツ語に残っていて、ゴート語形から少しくずれているが「エメリッヒ」という人名が残っている。注意深く観察すると「アメル」は天を意味し、「リク」は王国を意味する。現代ドイツ語ではそれが「ヒンメルライヒ」となり、天国または調和の国または祝福された平和の国を意味するのである。

イギリスで発行されている雑誌「ユース・メッセージ」によれば、次の事実も適切である。すなわちヘブライ語の「王国」にあたる語はメルクまたはアメルカである。故人の有名なオドラム教授によれば、1(エル)の字は或る場合には「(アール)」と交換されるといふ。したがって古代の「アメルカ(1を使用)」とい

「う語は、アメリカ（Eを使用）」と同じで、それがラテン語でアメリカとなる。そこで再び言う、異なる言語においてはアメリカは、「調和の国」、「天国」、「祝福された平和の国」を意味するのである」

これまでの説明ではイスラエルがどこにあったかを明示している。すなわち海中の島々なのであるが、米国を意味する記事を示していない。読者は尋ねるだろう。「米国を意味する記事が聖書中にあるか？ あるいはすればどうしてそれがわかるのか？」と。

この記事の第三章で、聖書の予言を調べてみるとマナセが米国の暗号名であることがわかると述べた。エフライムは英国の暗号名であった。特殊な各帝国において遂行されてきた予言類を調べてみると、それらはエフライムとマナセにおいて遂行されることになっていく予言類と一致することがわかるだろう。

創世記四八・一六―二〇にはエフライムとマナセに関する限り予言が分けてあることがわかる。弟の子孫は「連邦」になることになり、長子は大国になることになっている。ヨセフは長子が最大の国家になることを考えて予言が反対になることを望んだ。しかしヤコブ（イスラエル）は弟がより大いなる祝福を受けることを主張した。

イザヤ書の第四九章には米国の起源に関する予言が与えられている。「あなたが子を（米国になった十三の植民）失った後に生まれた子ら（植民）はなおあなたの耳に言う。「この所はわたしにはせますぎる。わたしのために住むべき所を得させよ」と」。

右の第二十節の前後の数節を読めば、「島々」のなかに位置するイスラエルはその最初の植民を失い、その後他の子孫たちが

広がり、新しい地域で開拓者となり、新しい国々を作るといことがわかる。このことをはっきり示す節は他にも多くあるが、それを指摘するかわりに、この問題を深く研究することに関心のあつた読者は自身で調査されたい。

予言に関する本稿は全然宗教とは関係なく、また同じようなことを言っている他の宗教団体を支持するものでもない。私が言いたいのは、高度に発達した惑星群から人間が地球へ来るのは、旧約や新約聖書の予言類に暗号で書かれている一大綜合計画に関連があるということである。そうした考え方で話を続ける前に、創世記第四八章その他多くの箇所が米英に関して実現していることを示す統計資料を少しあげてみたい。

全世界の耕地の半分以上は一九五〇年には米国と英国の所有になっていった。一九五〇年には米国は全世界の原油生産量の五〇パーセント以上を生産していた。英国と米国によって生産される石炭は他のすべての国よりも一・五倍以上である。この二国は世界の鉄鋼の四分の三、世界のニッケルの九五パーセント、アルミニウムの八〇パーセント、亜鉛の七五パーセント、金の三分の二を生産し、銅、鉛、ポークサイト、スズその他の貴重な金属の生産においてリードしている。またこの両国は世界の電気の三分の二を供給し、自動車の生産でリードしている等々。こうした事すべては後の時代にエフライムとマナセに属することになると予言された（申命記三三・一三―一七）。

それではこの古き世界地球に関する未来はどうか？ さほど遠からぬ未来において恐るべき第三次世界大戦が発生するだろう。そのときわれわれは（注||米国人は）現在友邦とみなしている国

々と戦うことになり、現在敵となっている（注||米国の敵）国々のなかには同盟国になるのがあろう。

予言で述べてあるように、その恐ろしい戦争は天空から来る人々の干渉によって阻止されるだろう。（マタイの福音書二四・三〇）。そして他の惑星群からの文字通りの侵入が行なわれるだろう。その戦争や飢きんや大地震などをまぬがれて地上に残された生存者は、地球を引きついで宇宙の法則のもとに新しい文明を始める人々（注||他の惑星から来る人々）によって統治されるだろう。この惑星人たちは、かつて地球への潜入者として地球へ派遣されていた人々のすべてによって援助されるだろう。

高度に進歩した惑星群から来るこの人々は多くの国で抵抗を受けるだろうが、結局は戦争を中止せざるを得なくなり、剣を打ち砕いて農耕具にし、訪れてくる新しい時代に従わねばならなくなるだろう。こうした出来事については各種の宗教団体が言っている。第二のキリストの到来”に関する予言を実現させることになるだろう。その予言が起こるとき、各宗教は大衆と共にその”到来”に抵抗するだろう。宗教は予言の表現としての大円盤群の来訪を認めないからだ。

過去にいくたびか大文明は自滅した。二、三の場合、その破壊は自然の原因によるものであった。たとえば地球の自転軸の変化が起こる場合の大破壊などである。

今度は特に自然の大破壊が間もなく起こることになっているし、同時に人間は自身の手でこの惑星上のあらゆる生命を破壊する能力を持っているので、地球上のあらゆる知識や科学的な発達が失われないうちに他の惑星からの干渉が行なわれるだろう。現文明

のあとに来るその新文明はいわばさい先のよいスタートを切るだろう。地上に残った人々は後に来る世代にたいし助言として役立つ貴重なレッスンを学ぶだろう。そのとき地球は真の黄金時代すなわち予言されている至福一千年の時代に入るのである。そして初めて宇宙の法則下に生きるこの世界は現状にくらべて一つの理想世界になるだろう。

最近（一九六七年十月二十七日—二十九日）起こった出来事のために、私は予言に関する本稿を短縮することにし、あとは読者個人の研究にまかせることにした。先に与えた”キイ”から鋭敏な読者ならば現在の事件（複数）と予言とを合致させることができるだろう。更に未来に起こる出来事を予知することも可能となるだろう。

（完）

（21頁より）

以上を要約すれば、ウォーミンスターに注意を引いたあの奇妙な物音は大体間違いないしに本物の奇妙な物音であった。また、その地区にはもっと調査する価値のある別な対象物があったと思われる。しかしウォーミンスターのUFO報告の大部分はニセものであるということにまず間違いはない。われわれ自身の体験や公表された報告類の注意深い調査の結果は、多くのUFO研究家はウォーミンスターへ行くとき自宅に批判能力を置き忘れるらしいことを示している。

ジョージ・アダムスキーの思い出

ルウ・ツインシュターク

ルウ・ツインシュターク女史はかつてアダムスキーの連絡員としてスイスのバーゼルで活躍した人で、現在もなおスイスG.A.P.のリーダーとして活動中である。昭和三十六年秋にヨーロッパ視察旅行中の九大農学部塩谷博士（編者の友人）がルウと会見された。以下の記事はルウが一九六七年六月にロンドンで行なった講演の一部である（編者）。

私は十年以上にわたってジョージ・アダムスキーと交際しましたが、何より重要だったのは彼が講演旅行でヨーロッパにいたあいだにまる六週間を一緒にすごしたことです。彼の手紙類を読んでも私は間もなく彼が純朴ではあるけれども知性人で、しかもすぐれたマナーを身につけているという強い印象を受けました。

この二つの印象は一九五九年に親しく彼に接したときに強められました。当時私はその洗練されたマナーにしばしば気付きました。たとえばティブル・マナーがそれです。或るとき私たち一同はバーゼルの有名な実業家の邸宅の夕食会に招待されました。この家の夫人はオランダの高貴な家の出身です。先方は二十種類の

特別な料理を出しましたが（おそらく意地悪い意図でそうしたものと思います）、それは普通の刃物類を使用したり一般的な食事作法に従って食べるのは全く困難な料理でした。しかしジョージは驚くほど気楽な上品な手つきで食事するので、あとで知人が語ったところによりますと、アダムスキーならばバキングダム宮殿の夕食会でも大丈夫だろうとのことでした。先方の夫人はジョージの談話に魅了されたようで、またジョージも雑多な、しかも大変興味ある話を続けました。

家族的背景について尋ねられたとき、ジョージは自分の貧しい両親のことを全然隠そうとはしませんでしたし、また自分がポランド出身であることを誇りにしていました。彼の話では、アダムスキーの「スキー」というのは男性語尾にすぎないので、のけようと思えば容易にできるのだが、父を記念して付けているのだそうです。

ジョージは婦人にたいしていつもきわめて礼儀正しく親切でした。バーゼルのレストラントで私たちについた女の子は、ジョージが多数の客のなかで最高にすてきな客だと言っていました。

ジョージ・アダムスキーの知性については簡単に説明できません。それは一般にも認められてはいませんが、これは彼が学者でなかったからです。実際彼は多読家でもありません。しかし時として意外に彼が円盤問題ばかりでなく多くの事柄に精通していることがわかりました。たとえば一九五九年にローマでポリマーニ博士夫妻と夕食を共にしたことがあります。ポリマーニは高い教育を受けた若いジャーナリストで、夫人もギリシアとローマの修道院で教育を受けた教養の高い女性です。兩人共心からアダムス

キーを信じたがっていましたが、円盤問題の大ファンでした（ついでながらポリマーニは例のモングッチ田盤写真の最初の印画をジョージと私にくれた人です）。

その夜ローマにおける一同の談話は楽しく続きましたが、やがてポリマーニが戦争と、それにユダヤ人にたいするナチの残虐行為の話を持ち出しました。すると一同が驚いたことにジョージはもちろんその残虐行為を弁護もしなければ容認もしないで、少なくとも十五分間戦前のドイツにおけるユダヤ人の状態と、ヨーロッパ人の殆どだれも今まで知っていない或る立証済の事実（複数）を語ったのです。ヨーロッパ大陸については殆ど何も知らぬはずの一アメリカ人の口から出る話なので奇妙な感じがしました。

一体にアダムスキーが歴史上の事柄に興味を持っていたとはだれにも言えないでしょう。そのとおりでして、それどころか彼は過去をきらっていました。過去を恥じていたのです。だから次のように言っていました。「未来に向かうことにして、過去は忘れようではないか」

田舎ヘドライヴに連れ出したとき、元ハプスブルク家の居城だったという城を遠方から見せましたら、彼は急に騒ぎだして「わーッ、もう城は見たくないよ」と叫びます。「イギリスでは次々と城を見せてくれたが、或る城では中世に敵を深い泉の中へ投げ込んだ場所で夕食会を開いてくれた。その残忍さを考えてごらん。しかもその場所でご馳走を出すんだ！ そんな気味の悪い場所は取りこわして忘れるべきだ」

そのとき以来私は古い遺物を見せることをやめました。しかし後にローマで同じような泉のある場所で夕食会を開いたのは仕方

のないことでした。ペレゴ博士が自慢してそれを見せたのです（注II アルベルト・ペレゴ博士はイタリアCAPのリーダー）。

そのうち私はジョージが二つの主な物事をひどくきらっていることに気がきました。その一つは、入らないですむ場合は決して教会へ入らなかつたこと、他の一つは自分の手に握られられない限り決してお金に触れなかつたことです。

彼がパーセルに到着した日に私はいくらかの金を渡しました。自分で買物をしたいだろうと思つたからです。しかし彼はその金を使いません。私が付き添っていなければ店にも食堂にも入ろうとはせず、いつも私に払わせるのです。これはもちろんかまわなことです。彼は私の招待客なのですから。しかし私が渡した金が一、二日して消えたと言ふべき理由があります。私は全然尋ねませんでした。話を聞いているうちに、彼がその金を朝ホテルへひそかに訪ねて来た。男たちへ渡したことがわかりました（この「男たち」というのは彼の知合いの惑星人なのだと言っていました）。私が全然知らないこの訪問者たちは私にとっていつも謎の人物でした。彼らは私がジョージのホテルへ行くまでに必ず来ていました。私がホテルの受付で話し合っていたとき、彼らが来ていることが気になったことが再三あります。彼らはいかにアダムスキーのことを尋ねて彼の室へ案内されるのでした。第二週目に「男たち」の一人が異様な風体でしたが、私に紹介されました。相手は実に立派な人のようでしたので、例の金をもらつたのはこの人なのだなと思つて私はすっかりうれしくなりました。

ジョージが教会へ入ることをひどくきらつたことは間もなく私

にとつてひそかな楽しみになりました。ただしそれは深い理由のあることで、本来笑うべき事でないことはわかっています。パーゼルでの最初の日に私はもちろん彼を大寺院へ案内しました。彼はその高い尖塔群をいんぎんな態度で見せていましたが、中へは入りませんでした。彼はすぐに一同が渡し舟で渡ったことのある河の方へ向きなりました。これを撮影したかったのです。「これがほんとうの自由エネルギーだ」と叫んで楽しそうに写していました。(注||このときアダムスキーが撮った河の写真を編者は所持している。ルウから贈られたもの)

ローマにいたとき私は彼を聖ペテロ寺院へ案内しましたが、またも彼はその建物よりも乗って行った馬車にはるかに興味を示し、馬車から降りようとはしないで、その印象的な乗物を撮っていました。

ところで或る日ジョージは教会へ入る必要にせまられたのです。レズリー氏(注||アダムスキーの親友デスマンド・レズリー)は可愛い小さな宮殿(十六世紀ないし十七世紀頃のもの)を所有しています。この宮殿の一部は使用されない礼拝堂になっています。二人の老尼が今もその一階に住んでいて、内部にはキリスト教の初期に殉教者が避難していたといわれる大昔の石造の小室があります。この小室は見る価値があり、ジョージも興味を示しましたが、彼は祭壇を見ようともせず、全然近寄らないし、一行の他の連中がやったような十字を切ることもしません。一同が聖人の絵画類を見ていたあいだ、ジョージは赤や黄金色の古物で柱を飾るのに忙しい尼たちに話しかけていました。彼はそそくさと礼拝堂を出て行きましたので、デスマンド・レズリーはむしろ驚いたよ

うでした。

一九五九年に、ジョージが聖ペテロ寺院へ入りたくなかった理由は「そこが多数の殺人の行なわれた恐ろしい場所であるからだ」と語ったのをおぼえています。「この場所は血で満ちている」とつけ加えました。やはり彼はヴァティカン歴史に精通していたと言いたいところです。もちろん彼はコロセウムもきらつて中へ入ろうとはしませんでした。彼は昔から残っている廃墟に刻まれている波動にきわめて感じやすい人なのです。

そうこうするうちに彼の特殊な知性に私は戸惑うようになりました。たとえば、彼はたしかにヨーロッパの哲学者、古代ギリシア人、古代ローマ人、ショーペンハワー、カント等に精通していません。たまたまと思えますが、しかし彼の最大の関心はだれもが知っているような哲学にありました。或るとき彼は「こんな哲学上の諸説はすべて無意味だ。というわけは哲学者たちが人間の感覚の能力を認めないで知的能力を過大評価したからだ」と説明したことがあります(もちろんこの感覚の能力を感情と混同してはいけません)。

彼はしばしば知覚や警戒力に関する人間の能力(まだ人間の内部に眠っている能力)について語り、また彼によれば殆どの人々の内部に放置されているという人間の本能的な力について語りました。彼は例の宇宙語、つまりあらゆる生きもの、植物、動物、人間などのための意志伝達手段を「テレパシー」と呼んでいます。

ジョージは偉大な意志の力を持っていました。それは沈黙を守る能力によってあらわれています。私の意見では、ジョージが日

常殆ど置かれていたような状況にあって秘密を守るためには、かなりの理性力ばかりでなく異常なまでに強力な意志の力を必要とします。たとえば自分が知っている事柄をしゃべるることによって大喝采を博すことができるような場合でも、彼は口を閉じ続けることができるのです。自分の心は秘密事項が埋められている墓場のようなものだと言っていました。

或るときジョージと私の二人きりになったとき、彼は垣根の両側（これは彼の言葉そのものです）、つまり米政府とブラザーズ（惑星人）の両方から多くの秘密事項をまかされたと言ったことがあります。これは彼が沈黙の誓いを決して破らないからで、人から尋ねられたときにはむしろとぼけるようにしていると言っていました。彼がホワイトハウスの側道へ通じる秘密のドアへ二度ばかり入ったことがあると言った言葉は真実だろうと思いません。他のこのような秘密のドア、すなわちヴァティカン宮殿のドアへ彼が入って行くのを私は見たことがあるからです。（注）ヴァティカン事件の詳細は本誌に掲載済）なぜ秘密のドアへ入って、別な入口から入らないのでしょうか？ またジョージの話ではケアリフォルニアのホットスプリングが重要な場所だとのこと、しばしばそこへ会合やテストなどに行ったということ、後に私はケネディー大統領がホットスプリングへの重要な旅行計画を急に変更したと報導されたのを見たとき、このジョージの言葉をはっきりと思い出しました。当時この重要計画の変更の理由について新聞に多くの憶測が掲載されましたが、ジョージはその理由を知っていたと思いません。しかし彼は他の事件すべてと同様にケネディーの秘密を守ったわけです。

またジョージは、秘密を守るために人名や場所を忘れるように慎重に自己訓練を行なったと言っていました。その例として、彼の家へ二人の地球人パイロットがやって来て、地球の言葉でなく別な惑星の文字で美しく書かれた手記を見せた事件があります。この男たちの話では、日課の飛行中に一機の巨大な宇宙船の中へ吸い込まれてしまい、内部を見せられたあと、宇宙船の乗員の一人が軍事基地について尋ね、ペンを借りて二人の眼前で驚くべき短時間でその手紙を書いたというのです。ジョージはその手紙のコピーを私に見せましたが、そのとき私が内気なためにコピーを作ってくれと頼めなかったことを今でも残念に思っています。この二人のパイロットは自分たちの名前を忘れてくれと懇願したのでジョージはそうしたと言っていました。この事件は当時評判になりました。なぜなら二人のパイロットは燃料を使用せず、しかもどこにも着陸しないで二時間を余分に費やしたからです。

ときとして真相を隠すためにジョージがあいまいな無意味な返事をするので、そのためひどく信用を落とすことがありました。しかし私自身の体験からいって彼にたいする私の信用は岩のように強固になっています。

空想か真実か

チャールズ・ポウエン

この物語は最初ブリティッシュユクロンピア(注||カナダ南西部の州)のプリンスジョージで発行されている『ザ・シテイズン』紙に掲載されたものであるが、後にW・ゴードン・アレン著、三次元を超えて来る宇宙船(注||一九五九年ニューヨークのエクスポジション社から発行)に概要が載せられた。『ザ・シテイズン』紙の記事のコピーを送ってよこされたブリティッシュユクロンピア、ヴィクトリアのP・M・H・エドワーズ博士に深く感謝する次第である。

一九五七年十二月の或る日、プリンスジョージの一住民が、『ザ・シテイズン』紙の事務所へ入って来て、異常な話題があること、告白して心の重荷をおろしたいこと、自分が狂人と思われるかもしれないことは充分承知していることなどを語った。『ザ・シテイズン』紙の編集者がこの事件をどう思っているかは別として、とにかく記事を掲載することにきめてくれたのはわれわれにとつて幸運であった。

その記事は同紙一九五七年十一月十一日(金)付に発表され、男と会見たロン・ポウエル記者の手で書かれた。名前は洩らさないようにという男の要求は容れられた。

ポウエル氏の注釈によれば、最初氏は全く疑ってかかったが、

ほんの数年前は地球の軌道を廻る人工衛星の着想さえもバカげたものだと考えられたかもしれないということにふと気付いた。だがやはり彼は多くの弱点をもとにして男のウソを見破ろうとして失敗した。抜穴を全く見つけ出せなかったのである。われわれが現在知っているUFO問題をポウエン氏がその頃知っていたならば彼はもっと驚いたことだろう。以下は男の物語で、本人の言葉で語られたままである。

私はオーストリアの米占領軍で働いていた。一九五一年五月十五日に兵たん部付将校カズン大佐の運転手をやっていたとき、リントツからザルツブルクまでヘイスト氏を運ぶようにと大佐が命令した。ヘイスト氏はリントツの米兵相手に夜学の授業を受け持っていた。私の仕事は週三回ザルツブルクからリントツへ氏を運ぶことだった。

その日私は夜十一時頃いつものようにリントツから帰ってザルツブルクの北五マイルの所にある駐車場へ到着した。車をそこに置いて家に向かって歩き出した。近道を通ったが、左側はヤブになっていて、暗くて月は出ていなかった。

誘拐される

突然だがそのヤブから出て来て私の方へ近寄って来た。暗いので輪郭しか見えないが、ヘルメットをかむっているようだった。私と同じくらいの高さか、ちょっと低目くらいだろう。手に何か持っていて、それを私の方へ向けるのだ。相手の指なのだと

うと思つたが、カチンという音をたてた。

その音のあとで相手は手を素早く振るので、私は顔の前に腕を上げる身振りをしたけれどもマヒした。倒れそうな感じだったが、倒れない。相手は私の胸に黒い四角な板をつけてそれを手で背中からぐるぐるとしぼりつけた。遠くで犬がほえるのを聞いたが、相手の歩く音は聞こえない。全く気楽に歩いたのだろう。相手が私のからだのまわりを歩くにつれて輪郭を見ることができた。

板をからだにしぼりつけてから相手は私の前に立って歩き出した。そして手の中に持っている物を始めのように私の頭にてなく今度は胸につけてある板の方へ向けるのだ。歩いて行きながらそのあとを私のからだを引っ張った。私は動くことも歩くこともできなかつたが、相手はとにかく引っ張って行く。私は実際には空中にいたのではないが、全体重は地面にかかっていなかった。からだは軽くなつたような気がした。

ヤブの背後に小さな野原がある。その野原の中に道路から見えないようにして径約百五十フィートの円型の物体があつた。黒い物で、何なのかわからない。最初浮かんだ考えはスパイが何かの理由で私を捕えたのだということだつた。

私を連行した相手は地面からいわば浮かび上がって、物体の頂上へ私を引っ張り上げた。相手は何かを踏んだかボタンでも押しただかしてドアが開き、暗黒のなかへ私を引っ張りおろした。すっかりおびえた私はどうなるのかと思つていと、暗黒のなかを降りて行ってやがて足の底に床を感じる事ができた。

私がい場所がガラスか透明プラスチックで出来ていることがわかつた。頭上に星々が輝いているのが見えたからだ。それか

らドアとおぼしき物の輪郭が見えて、そこを通過して別な場所へ引っ張つていかれたが、後になってそこはガラスまたは透明プラスチックの部屋とわかつた。

相手は指を一指だと思つていたのあとでエンピツ型の物とわかつたのだが室内へ入るまで私の方へ向けていた。ずっと私の方へ向け続けていたが、室内へ入ったときそれをそらしたので、私は床の上へヘタヘタとくずれてしまった。相手は出て行つたので輪郭を見ることができた。そこには一種の振動感があり、室のドアがしまつてゐるのがわかつた。

次に受けた感じは空中へ昇るような感じだつた。それまで私は飛行機で飛んだことはなかつた。数分してから下弦の月が輝いているのが見えた。私はおびえたが夢を見ているのだろうと思つた。やがて私は再び両手両足を感じ始め、上半身を起こして立ち上がった。この頃までには日光をあびていた。

人 間

船内のむこうを見ると私を連れて来た人が見えた。彼は壁のそばに立っていて、そこにはいくつかのレヴァーがあつた。相手はわれわれと同様の人間のように見えたが、私より少々背が低かつた。

そのとき私には相手が悪魔のように見えた。頭髪はない。一種のガラス製ヘルメットを透して見えたのだ。その頭はいわば円筒形だつた。非常に広い額と大きな眼。二つの大きな眼の中に多数の小さな眼が見える。ハエの眼のように思われた。鼻は全然なく、

二つの穴があるだけだ。口の部分にはきわめて小さな裂け目があった。皮膚はあるようだが、いわば白色だ。耳としては二つの穴があり、頭はたいそう大きかった。

胴はブリギカンみだいに丸く、両脚は手頃な長さで、両腕はわれわれのものより少し短い。両手は三本の長い指から成っているようで、首の部分は見えない。絹に似た材質のものを着ていたが光ってはいなかった。この衣服がヘルメットを着用した頭部を除いて全身を覆っていた。相手は私を全然見ていなかった。

私がいた室内から見える船内の主な部分は丸く見え、壁はガラスみたいだがすき通ってはいない。床もガラスまたはプラスチックで出来ていた。床の中央、ガラスの下部に一枚の黒い板があり、それは私の胸にとりつけられた物に似ていた。約十フィート平方と思われるその板の各隅から黒い放射線が船内の壁へ流れていた。

その黒い板の下部が見えたが、そこは船内の反対側で、同じような室があるらしかった。そこでも怪物が壁のそばに立っていて、同種類のレヴァー類が見えた。

船体が太陽の光のなかに入るとすぐに焼けつくような熱を感じたが、相手が一本のレヴァーを引くと青い水に似た覆いが屋根の上に来た。すると日光は正常になったけれども、覆いを透かしてなおも太陽を見ることができた。

私の最初の考えは夢を見ているのだということだったが、次に起こった考えは、私は死んでいて魂が上昇しているのだということだった。

月

船体は回転しているのでもなければ、横に進行しているのでもなく、そのまま上昇していた。太陽が火の玉のように見え、月が銀の玉のようであったが、他は暗黒だった。ふと上方を見上げると月が頭上近くにあり、われわれの方へ落ちて来るように見えた。突然われわれ二人は例の屋根の上に立っていた。われわれは月の上空四百メートルばかりの位置にいるように思われた。

月の火口群が表面にはっきりと見えた。沢山ある。地面は灰色のようで、岩や丘などが見える。われわれは日光があたっている部分にいた。船は右方へ滑空して暗部へ入って行った。

すると運転者が船を停止させた。私はそれを一種の待機だと感じた。外部はすべて暗いが日光が船内にさし込んでくるように思われた。怪物が私の方に向けたあのエンピツ型の物の一つを取って、それを下方へ向けた。そのときこのやつは月から来た者で下方のだからに合図をしているのではないかと私は思った。

船体にもその合図にも音はなく、約五分後に再び右へ動き始めた。始めは地球へ帰るのだろうと思ったが、アメリカに続いてアジアの輪郭が見え、雲が見えた。

地球と月は急速に私から離れて行く。そこで私はこの宇宙船は別な惑星から来たのだと思い始めた。

火 星

突然別な惑星がわれわれの眼前にぼんやりと浮かび上がって

るように思われたので、それに激突するのではないかという気がした。きっとそうなると思ったが、運転者がまたも急停止させた。しかし動揺は感じなかった。そのとき船はその惑星からまだかなり遠いことに気づいた。やがてわれわれは地上めがけて横すべりに降下し始めた。

降下しながら私は地上を見わたした。一方のがわに赤い野原（複数）があり、別ながわにはうす緑の野原のようなものがあった。その野原のなかのあちこちには地面から突き出た大きなエントツの如き物があった。明るい白昼で、空には雲もなく、太陽が輝いている。

船は赤い野原に近づいて行く。そのなかに青い水の流れる川（複数）が見える。各川は直線に流れていて、ところどころに橋をかけてあり、道路も見える。橋は地球の橋と全く同じだ。

高空からは生命のシルシは見えなかった。

やがて船は私が乗っている円盤と同じような円盤群でうまっている或る野原へ滑空した。数百機の円盤がいるようだ。それらは灰色、黄金色、銀色等の異なる色を帯びているが、黒や赤色の円盤はいない。

運転者はレヴァーを引くだけでその上空約四百メートルのところに船を停止させた。それから地上約二、三十フィートの位置まで垂直に降下し、高いプラットフォームの上に船体を着陸させた。降下しながら運転者と同種類の姿の人々が各円盤の中に見えるのが見えた。

プラットフォーム上に着くと運転者はレヴァーを引く。ガラスがうしろへ移動して彼が外へ出た。彼はエンピツ型の物を自分の

胸に向けて、落ちる木の葉のように地面へふんわりと飛び降り、続いて三、四番目にある円盤の方へ急速に歩き始めた。そしてエンピツをまた胸に向けると飛び上がって船内に入ったが、その円盤には約十分間入っていた。他の円盤の中にも怪物がいたが、私の乗った円盤の運転者よりも少し小さかった。

彼がその円盤内に入っていたあいだ私は周囲を見まわして別な円盤群をながめた。怪物と同じ型の人々が見えた。

突然、かなりむこうに地球人を乗せた二機の円盤が見えた。一機はよごれていて、内部には男一人、女一人、子供二人がいる。近くのもう一機は黄金色で、一人の男と一人の婦人が見えた。

私は彼らに向かって手を振ろうとしたが、恐ろしくなった。彼らが手を振るのを待ったが、連中は手を振らなかった。それを見たあと、私は連中と一緒にここへ滞在することになるのではないかと思った。

遠くの川のそばに何ものかが動いているの見える。それは黒い何なのかわからない。食用牛の群れのようにもあるが、たしかなこととはわからない。

地面には大きな赤い花が咲いていた。ヒマワリに似た花だ。花のあいだには緑草帯があちこちに見えるが、眼のとどく限りその花が咲いていた。緑の原のなかに地面が見える。それは地球の地面と全く同じだ。

私は火星にいるにちがいないと思いはじめた。それが赤い惑星であることや運河があることなどを学校で習ったのを思い出したので、ここはどうやら火星らしいという気がした。ただし百パーセント確実だというわけではない。月を離れたときに物の位置感を

失ったからだ。

やがて円盤の運転者が別な円盤から帰って来た。中へ入って再びドアーをしめた。そして来たときと同じコースを離陸した。ぐんぐん上昇して暗黒の中へ入り、続いてスズの球みたいな月が見えた。かなり接近したが、それはなめらかな銀色のもので、表面には火山口など全然なかった。

帰 還

われわれはどこへ行くのかわからない。もっと遠くへ行くのではないかと思った。約十分後に半月形の物が見えたので、地球の明るい側へ近づいていることに気づいた。

それが地球だったことがわかってとてもうれしかった。だがさまざまのスピードで接近するので、きつと激突するだろうと思つた。すると運転者が大気圏に突入したと思われ、頃に再び船を停止させた。そして地球の方へ滑空して行った。彼はもと私を見つけた場所へ連れて帰るのだということが何となくわかつていたが、秘密を保つために私を殺そうとしているのではないかという気がした。

われわれは暗黒の中へ入って次に地上へ降下して行った。彼が私を捕えた場所へ帰ることはわかっていた。

殺されるのではないかと私はほんとうに恐ろしかった。彼はドアーをあけて小さなエンピツ型の物を取り出し、中へ連れ込まれたときと同じやり方で私を外へ引っ張り出した。彼はまっすぐに道路へ導いた。そのとき私は歩くことができたが、大変軽くて、

彼はただ私を引っ張っているだけだった。

彼はエンピツ型の物を私の胸からそらして頭の方へ向けた。そのとき犬が道路のむこう約四分の一マイルあたりからわれわれの方へ帰り始めていたが、それは相手をハッとさせたようだ。なぜならエンピツ型の物がカチンと鳴ったけれども私には何も起こらなかつたからだ。

最初の体験からして私をマヒさせることがわかつていたので、相手に気づかれないようにわざとマヒしたようなふりをした。彼は私の胸から板をはずして円盤の方へ帰って行った。

私は円盤が遠くへ去って行く光景を見るまでそこにジッとしていたが、やがて走って帰宅した。

妻はまだ起きていて、興奮しきっている私を見た。どうしたのかと私に尋ねたが、「何でもない。気分が悪いだけだ」と答えた。この体験を妻に話すことはできなかった。彼女は私が完全に気が狂ったと思うからだ。帰宅したとき時刻に気づいたが午前十二時二十分だった。捕えられてから帰るまでに約一時間かかったわけだ。怪物が別れぎわにエンピツ型の物を私の頭に向けたとき、事件のすべてを忘れさせようとしたか、それとも殺そうとしたのだろうかと思うが、そのいづれかはわからない。

私は二つの理由でこの事件についてだれにも話さなかつた。一つは、だれも私の話を全然信じないだろうし、みんなは私を狂人として監禁したがるだろうということ。もう一つは、火星の人々は地球上で起こっているあらゆる物事を知っているのであつて、もし私が体験を人々にしゃべったならば火星人は私を再び連れ去るか、それとも殺すだろうと思つたことなどである。

私が今体験を話すのは、宇宙で起こっている物事を人々が知るのを助けるためである。心は今落ち着かない。だがこれから先さほど長生きはしないと思うので、火星人を恐れはしない。

私を持ったこの体験からみて、火星人の文化や科学知識はわれわれのそれをはるかに越えていると思う。彼らは宇宙船を打ち上げるための人工衛星を必要としない。地球人が征服しようと努力している宇宙の諸問題の多くを征服しているのである。彼らは円盤を放射線で、たぶん光線で推進させているようだが、地球のようなモーター類はない。

私の体験や、火星で地球人を見たことなどは、火星人が地球人について偉大な知識を有し、地球人よりもはるかに進歩していることを示している。火星人は私を動物として扱っただけなのだ。

その事件の後、私はオーストリアにいられなくなり、その年の十月にカナダへ来た。そしてついにこの話を公開したいと思った。現在二個の人工衛星が地球を廻っている（注IIこれは初期のもの）、たぶん少数の人は私の話を信ずるだろう。とにかく私は事件を記憶通りに話した。まるで昨日の出来事のようにはっきりおぼえている。

（注II以上で体験談が終わる。以下はポウエン氏の意見である）
私は数年前にこの驚くべき体験記に初めて接したが、最初の反応は、多量の下剤を飲みたくなったことだった。この自動車運転手がハエの目玉の機長から受けた待遇を想像したとき、心に次々とコッケイな場面が浮かんだのを思い出す。

「おまえの話を取り消せ、このバカ。仲間を忘れたのか・・・」

われわれにはむだだ。あんまり古くさい事じゃないか」体験者X氏との会話を想像するのも容易だったと思う。「おうかがいしますが、あなたの宇宙旅行は実際に必要なことだったのですか？」だが時日は過ぎた。別なコンタクト例の証拠が流れ込んできて、このオーストリア人の体験主張を再度考えさせた。たといこの宇宙旅行がわれわれが理解している範囲において必要でなかったにしても、見たところ空想じみたこの物語に真実があったとしたらどうだろう。

ゴードン・クレイトンと私はしばしばこの事件で議論したが、健忘症を起こしそうなややこしい記述のバーニー・ヒル事件の物語が出現してわれわれの興味は一新した。今この一九六七年において自称宇宙旅行のこの上ない無意味さ、E氏の怪物の容貌に関する記述と、「運転者」は彼の心中から宇宙旅行の記憶を消そうとしたのかもしれないという彼の最後の憶測等、すべてが問題を今後の注意にゆだねている。

正直に言うと、申し分のない、信頼にあたらしい一エングニアがこの種のコンタクト物語を熟考することをやめるというのは驚きであるが、フライアン・ワインダー（注IIポウエン氏の友人）にこの物語を伝えたらそのとおりだった。彼は、「運転者」に関する件や天芥に足をつけて自分たちが立っているのを発見した人については気に食わないが、「青い水」のような日除けの話は非常に興味があるという。私としては始めに「物体」または「船」といわれていた乗物が急に「円盤」という言葉が使用されたことに身がすくんだ。また「直線の川」という説明に両肩をすくめたのである。というのは、多く観測され、最近写真にも撮られた火星

の「カナリ」が運河であるとすれば、当然巨大な巾を持つ水路であるはずだからだ。またこれほどに進歩した人間が「橋」を必要とするのもどうも変に思われるし、「彼らは宇宙船を打ち上げるのに人工衛星を必要としない」というX氏の注釈も、宇宙開発問題に関する現代の純理論的な書き方についてX氏の或る程度の知識を暴露している。

しかし……どうも考慮すべき「しかし」が再三ならず出てくるが……！

最初のスプートニクからの信号が、当時任命されたばかりのアストロノマー・ロイヤル（注||グリニッチまたはエディンバラの天文台長）に軽蔑の仕草を示していたときにX氏は物語を発表したのである。（ウーリーがアストロノマー・ロイヤルの地位に就くためにロンドン空港へ到着したとき、記者会見で彼は「惑星間旅行の前途は全く見通しはない・空飛ぶ円盤は存在しない」と言明した）私はどうも最初の人工衛星の成功かまたはアストロノマー・ロイヤルの狼狽のいずれかのために、あのような火星行き物語の発明が促進されたのではないかと思う。しかしこの物語が全くのでっちあげであったとしても、作者はネタになるような円盤着陸物語類に殆ど関係はない。なるほどアダムスキーの最初の二著書はそれまでベストセラーになっていたが、ザルツブルク発火星行き急行の運転者は「高貴なる金星人」のイメージとはおよそ縁遠いし、耳で聞こえる言葉によるにせよテレパシーによるにせよ会話の行なわれた形跡はないし、まして地球人への「メッセージ」などかけられない。ブラジルの密林から出て来たA・ヴィリヤス・ポアス青年が「細長い口をした婦人」との秘密の事件をオ

ラヴォ・フォンテス博士に語ったのは右の火星行き物語の告白より二カ月後のことだし（注||この有名な事件は本誌で紹介済）、シモン博士がバーニー・ヒルの潜在意識から、口の細長い人間たちについてしゃべらせた物語を発表したのはそれから六年後のことであるし（注||この事件の概要も紹介済）、マス氏に或る道具を向けて氏をマヒさせた、口の細長い人間の事件は八年後に起こったことである（この事件は本号の「ヴァレンソルの着陸事件」を参照）。ゆえにX氏がこれらのコンタクト物語のどれかから「細長い口」のアイデアを得たはずはないし、またヴィリヤス・ポアス青年やマス氏がブリティッシュニューロンビア、プリンスジョージの「ザ・シティズン」紙を読んだとも到底考えられないことである。

別な観点からみると、問題の火星人誘拐者はポアス青年、ヒル夫妻、マス氏らが遭遇した「惑星人」とは似ていない。その火星人はどうやらホセ・ヒギンスの「出目の宇宙人」に似ているようだが、この宇宙人も、また私が記憶している限りの如何なるコンタクト例に出てくる宇宙人にしても、ハエのような多面体の目玉を持ってはいなかった。

しかし鼻のかわりに穴を持つ人間が報告された例はあったようだし、ペロ・ホリゾンテの「一つ目の人間」には耳たぶがなかった。

プレマノンの子供たちはロボットのような白色の（角砂糖型の）生きものについて語っているし、シスコ・グロウヴ事件の犠牲者はロボット型生物の働きによってひどい目にあった。

最後に注釈を必要とする「火星人運転者」の身体上の特徴は手

である。再度言うと、この「手」は新しいものようだ。ヴィリヤ・サンティナ事件の小人たちは一そろいの向かい合った指を持っていた。スコリトンにおいても指は四本だけで、親指はなかった。

何より重要なのは、ザルツブルク付近に現われたその生物は、円盤生物の採集箱用として新しい標本であるらしいということだ。

この異常な物語の別な特徴を更に述べると、一つは引力との絶縁である。本人が実際に浮かび上がったのか、それとも彼に向けられた道具のために頭が変になったのか？ 次に見落としてならないのは「日光が船内にさし込むように思われた」にもかかわらず、宇宙空間は暗黒だったことである。天文学者は宇宙空間は暗黒だろうと仮定していたけれども、当時この考えを確証するために宇宙空間へ行った者はなかった。

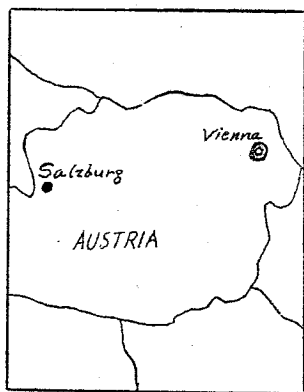
その火星船は光線で推進したという説明もある。一九六五年一月三十日にケアリフォルニアでコンタクトしたと称するシド・パトリックは、彼の見た宇宙船は「それ自体の原動力で推進するのではなく、むしろ光線から伝えられる或る動力で推進するのだ」と言っている。

火星物語のなかで考え込まさせる一部分は「スズの球のように見えた月……なめらかな銀色のもので、表面には火口の形跡はない」というくだりである。これの含みは、これは火星の衛星の一つ、フォボスカダイモスではなかったかということだ。I・シフロフスキー博士は一九五九年五月一日に、火星の二つの衛星は人工的なもので、内部は中空で、大部分はアルミニウムとマグネシウムで作られているという説を発表した。この声明はソビ

エト科学アカデミーにたいしてなされたものである。

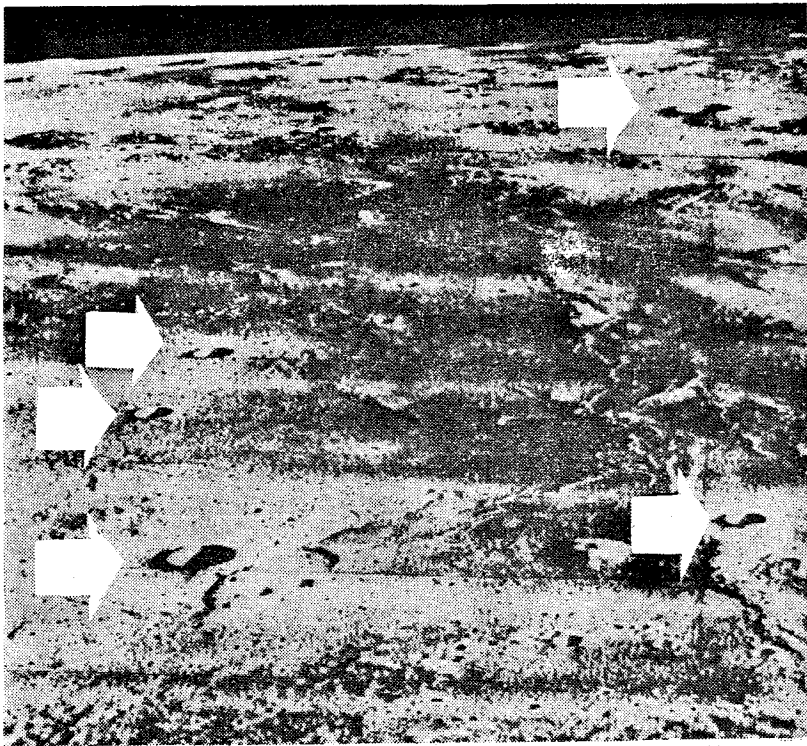
これがほんとうだとすれば他の二つの陳述はいささか驚くべきものとなる。その一つは火星で地球人が見られたこと、それらはX氏の存在を認めなかったこと、である。これが意味するところは、その地球人たちは何かの精神的支配力のもとにあったのではないかということだ。「フライイング・ソーサー・レヴェュー」誌は「ザ・ヒューマノイド」と題する特集号に、似たような円盤同乗をやったというメキシコの学生たちの記事を載せたが、彼らによるとやはり誘拐された或るブラジルの家族を見かけたという。もう一つの陳述は、X氏は会話の試みについて何も言及しておらず、動物のように扱われたと言っている点である。これについて彼は次のように強調した。「相手は私を全然見ようとはしなかったが、ハエの眼のような目玉があるので、たぶん私を直接見る必要はなかったのだろう」

以上の物語を事実と信ずるのはまだ困難であるが、ただの空想の産物であるとすれば、作者は豊かな想像力を持つのみならず、ちょっとした予言者でもあるということになる。



月の神秘の孔群

この写真はルナオービター2号が撮影したマリウス火口付近の光景である。白い矢印が示す五個所の孔は普通の火口とは異なって幾何学的な全円形であり、人工的建造物ではないかと言われている。左手前の円孔は径約2マイル、円周は高さ約500フィートの垂直な壁で出来ている。



ウォーミンスターの
調査報告

ジョン・ハーニー
アラン・シャープ

この二人の筆者は英国のマーシーサイドUFO研究会の幹部で、ハーニー氏は機関誌「MUFORGブレティン」を編集している。この記事はその機関誌一九六七年七月号に掲載されたもの。両名によるUFO観測のメッカと称されるウォーミンスター(注||英国のどのあたりか不明)調査報告であるが、実はいかがわしいUFO研究グループにたいする批判とやゝ記事なのである。

(編者)

われわれは一九六七年五月二十七日、土曜日の午後にウォーミンスターに到着した。そして間もなく、その週末に他のUFO研究者たちがそこに滞在していることがわかった。

その日の午後、一グループが前夜バトルズベリー丘の見晴らしのよい場所から二個の赤い葉巻型物体を目撃したと言っていることを知った。われわれが聞いているところでは、この目撃は一種のテーブルターニング(注||テーブルに数人が手をのせて思念すると降霊作用によりテーブルが動き出すという心霊実験用語)の交霊会中に得られた予言が実現したものであるという。われわれはこれに出席していなかったので詳細な内容は書けない。これに

関してはノー・コメントである。(注||英国は心霊実験や交霊会が盛んであるが、編者はこのようなものを信じない)

その土曜日の午後から夕方にかけて「今夜何か一大事が起こる」という流言が広まっていた。われわれはそんな感じを持たなかった。その理由は今もってはっきりしない。

アーサー・シャトルウッドとその友ボブ・ストロングは土曜の夜間観測隊を編成した。明らかに彼らの魂胆は週末に開放される陸軍の射撃場を利用して、荒れ果てたインバーの村へ遠足に行くことなのである。われわれは指定された時刻にウォーミンスターでそのグループに加わったが、間もなく何か議論が起こった。どういうケンカなのかよくわからないが、シャトルウッドがストロングのいざれかが、観測隊の人員が多すぎるので、こんなに多勢で押しかけてはUFOがいやがって出現しないと思っただけに、観測隊の先導車数台がだしぬけに出発して、われわれはじきにそれを見失ったので残りの者は近くのクレイドル丘ヘドライブすることにきめた。どうみてもUFO観測用に他のどこにも劣らないほどのよい場所である。

クレイドル丘の頂上に到着してみると一行の他の連中が結局そこへ行っていたことがわかった。また大ゲンカが始まった。様子を見ると、この丘にいるほうがよいという者と、インバーへ行きたがっている者との間がよいという者と、インバーへ行くのあいだでどの道を行くかについて意見が分かれていた。また、さまざまの噂が流れていた。「もしシャトルウッドが射撃場へ車を乗り入れるならば陸軍が射殺するだろう」という噂もその一つ。全体がひどくごたついていて、この混乱の責任を特定な人に負わ

せるのをわれわれはためらった。

遠くのカミナリ

結局幾人かがクレイドル丘を離れて射撃場へ車を飛ばした。衛舎へ着いたときシャトルウッドとその友人たちはすでにそこにいた。近道をまわったのだ。続いてわれわれは数台の車のあとに従って射撃場を横切り、インバーへ入り、更に村の先へ半マイルばかり進んでそこで観測を開始した。空はかなり曇り、数個の星しか見えない。しばらく異常な物は見えなかったが、やがて一人が東の方向の地平線上にカミナリの閃光を認めた。この光は東と南東へ続いた。カミナリの音は聞こえない。ゆえにアラシが遠方であつたにちがいない。

別な車が一台ずつ離れて行くので、ついにわれわれもシャトルウッド氏が何か幸運をつかんだかどうかを知るために衛舎へ引き返した。到着してみると数台の車がとまっていて、聞くところによるとカミナリが始まったときにシャトルウッドはすっかり興奮して、あれは絶対にカミナリではなく例の「物」の現象だと言つたという。彼はそれから夜の闇の中へ出かけて行つた。もっと近い場所からそれを見たいのだという。

しばらくしてからシャトルウッドの車が帰って来て、すぐに、遠くのアラシによつて起こつた単なるカミナリと思われる現象について実に驚くべき話をしたが、そのあと彼の車は出て行つた。われわれはその後しばらく残つて、午前一時三十分頃に出発したが、そのとき雨が降り始めた。

雷光のショウにたいするシャトルウッドの反応は、ウォーミンスター観測会中に見られたというUFOの多くに関するわれわれの疑惑を解消させなかった。「信じたいという眼」で見ているときに普通の雷光がこの世以外の物に変形されることがあるとすれば、このような観測会中に自然のものにせよ人工的なものにせよ、別な何かの現象が同じやり方で全く誤つて解釈されていると考へても差支えないだろう。

昨年の英国UFO研究会北部大会におけるシャトルウッド氏の講演にたいする評論で、このことがほのめかされたとき、大きな憤りが起こつた。その評論で述べられた意見はウォーミンスターの観測の体験を持つ人々から入手した情報に基づくものであつた。たとえば信頼すべき筋から得た一報告は、星を指して「確実にUFOだ」と言つた或る著名なUFO研究家の意見から成るものだつた。(注II シャトルウッド氏が狂信的UFO幻想家である旨を意味している)

働きすぎる想像

その週末に、スター丘の着陸事件に関するシャトルウッドとストロングの報告について討論が行なわれた。この事件の記事はSFOAの最近号に出ている。この事件以来さまざまな円盤研究グループがスター丘へ行き、「奇妙な光」が出たといわれる家を調査した。その家は廃屋だつたと言ふ人もあるし、そうではなかつたと言ふ人もある。そこで日曜日(一九六七年五月二十八日)にアラン・シャープが問題の家を訪問して、それが二、三の農園

と約半ダースの労務者の家々から成る部落であることを発見した。また例の廃屋は、別な場所に家を持ってゐる所有者がそこに常時住んでいないというだけのもので、使用人たちがその家の番をしていて、所有者はときどきそこを訪れるということもわかった。その部落の他の家々には人が住んでゐる。

その廃屋の東にある最も近くの農園の所有者に会うと、彼は付近一帯でも奇妙な物は見なかったという。相手は奇妙な光の話を面白そうに聞いたが、謎の物体の正体を陸軍と考えてゐるようだった。

ケアロウェイ林と呼ばれてゐる雑木林の付近で各種の驚くべき事件が発生したといわれている。われわれはこの地域を訪ねたが、アラン・シャープはその林からわずか数百ヤードしか離れていないニューファームを調査して全景をながめた。農夫とその息子が言うには、二人はその林一帯で異常な物を全然見なかったということ、或る名の知れた土地の人々が想像力を働かせすぎたのではないかと言う。また付近一帯を歩きまわっていた人々(UFOファン)のなかで調査の許可を求めて農園に交渉した人はいないと語った。

不思議な物音が聞こえるという(ウォーミンスターの音と呼ばれるもの)家々の一軒を訪れてみた。家人と会い、音を庭や水路などから採集し録音した。どうみてもこの不思議な音の報告類に誤りはないようだ。ヘリユプターの活動のせいだと説明しようとした人もいたが、この説はわれわれが聞いた状況報告からみて納得のゆくものではない。一方この物音を別な感型から来た宇宙船の活動によるものという一般の考え方を認めるのはいささか早計

である。たとえば自然の異常な大気の電氣的現象のような他の可能性も考慮するべきだ。

或る訪問者

日曜日の夕方、われわれはシャトルウッド氏がその日の午後10時、コンタクトしたと称してゐることを知った。宇宙人らしき者が彼に電話をかけてきたので、相手がインチキでないことが絶対に確実ならば直接に対面したいという意味のことを語った上、受話器を切ったという。すると数分後にドアーをノックする音が聞こえて一人の「宇宙人」がたしかに入つて来た。この人間は非常に広い額と青いくちびるを持つ人で、一、二言語だったが、そのとき第三次世界大戦が間もなく発生すると語った。この奇怪な人物はシャトルウッドの家族の人々にも目撃されたという。

その日早くアラン・シャープはウォーミンスターの或る時味な住民によって料金箱に金を入れないで市内電話をかける技術の実演に招かれた。この理由は、宇宙人が公衆電話ボックスから電話をかけたとき金を入れる音を聞かなかったとシャトルウッドが言ったからである。どうもシャトルウッド氏の最近の体験なるものには電話システムの技術面の研究も必要とするようだ。現段階ではこの新しいコンタクト例に関して言うべきことはない。

その後、同日夕方にわれわれはクレイドル丘へ観測に行った。同行したのはケン・ロジャーズとナイジェル・ステイヴンソンである。晴れた夜で、一同は一機の飛行機、四個の流星、一個の人工衛星を見たが、UFOは見えなかった。(5頁下段へ続く)

円盤の乗員に救われた

瀕死の少女

オラヴォ・T・フォンテス (医博)

一九五八年五月十七日に友人ジョアワン・マルティンスが、一九五八年五月十四日付リオデジャネイロ発の次のような手紙を受け取った。マルティンスは当時ブラジルのUFO騒ぎに関する連載記事を『ウ・クルゼイロ』誌に書いていた人である。

ジョアワン・マルティンス様。あなたの記事を読みました。お祝いの言葉を申し述べたいと思います。

私はいわゆる空飛ぶ円盤の存在を信じています。それに関連した或る事件の目撃者であるからです。あなたが私を信じて下さるかどうかは知りませんが、真実のみをお話することを心から誓います。私は貧しいけれども正直です。関係者たちの本名を洩らしませんが、このことはおわかりになると思います。

私の名はアナズィア・マリア。三十七才。今リオデジャネイロに住んでいます。(注||この婦人の正式な名は本人の依頼により秘してあるが、FSR編集局にはわかっている)

私は一九五七年十二月までX氏—私の以前の親方—のもとで働いていました。彼はこの町のお金持です。その氏名を明らかにできないことをお許し下さい。

その親方の娘は胃ガンでした。彼女は重病でしたので私は一種

の家政婦として働き、主として娘のライス嬢の世話をしました。

彼女はあらゆる治療を受けましたが、医師は望みはないと言っていました。一九五七年八月に、親方はペトロポリスに近い彼の小農場へ全家族を連れて行きました。気候のよいその土地で住めばライス嬢がよくなりはしないかと考えたからです。しかし日数が経過しても何も起こりません。食べることもできず、苦痛は恐ろしいほどで、本人はいつもモルヒネの注射を受けていました。

十月二十五日の夜、よくおぼえています。ライス嬢の苦痛がものすごくなってきたので注射も効果がありません。もう死ぬのではないかと一同思いました。親方は部屋の隅で泣いていました。すると突然強い光が家の右側を照らしました(小農場にある家です)。みんなはライス嬢の部屋に集まりました。その窓はちょうど家の右側にあつて、室内は小さな電気スタンドで照らされていますが、突然その部屋がすごく明るくなったのです。まるでサーチライトの光線で室内が照射されたようでした。

親方の息子のジュリニョがまず窓ぎわへ走り寄り、いわゆる円盤を見たのです。あまり大きくはなく、直径や巾がどれほどだったか私にはわかりません。私知っているのは、あまり大きくなかったこと、上部は黄赤色を帯びていて、急に自動ハッチが開いて二人の小さな人間が降りて来たことです。二人は家の方へ歩いて来ました。別な一人が円盤のハッチ内にとどまっています。円盤は暗くなって、その内部—ハッチを通して見えた—にはナイトクラブで見られるような薄緑色の光が見えます。

円盤の男たちは家の中へ入って来ました。背が低く、身長は一メートル二十センチばかりで、親方の十才になる息子よりも小さ

く、肩までたれた長い髪をし、それは黄赤色の髪で、小さな眼は中国人のようにつり上がっていますが、明るい緑色の眼です。手には何かをはめていましたが、それは手袋だったと思います。生地は白くて厚いようでした。衣服は全体が白く、胸と背と手首のところが輝いていました。それをどう説明してよいかわかりません。二人はライスのベッドに近づいて来ました。ライスは眼をカッと開いて苦悶しています。周囲で何が起こったのか知りません。みんな恐ろしい予期のもとに無言のままじっとしていました。私はX氏夫妻、ジュリニヨ夫妻、親方の十才になる息子オタヴィニヨたちと一緒に室内にいました。

二人の男はだまって私を見てライスのベッドわきでとまり、持ってきた物をベッド上にひろげて、X氏を手まねきして、一人がX氏の頬に片手をあてると、X氏はテレパシーでもってライスの病状などすべてを彼らに話し始めました。室内は完全に静寂でした。

二人の男は青白い光でライスの腹部を照らし始めました。するとそのために腹部内のすべての物が見えるのです。一同はみな少女の腹部内にあるものを見たのです。するとカチカチという音をたてる別な器具を一人がライスの腹の方へ向けました。私たちは胃の中の潰瘍を見ることができました。

この手術は殆ど三十分間続きました。ライスは眠り、二人の男は出て行きましたが、家を出る前にX氏へテレパシーによって、一ヶ月間ライスを癒へ投薬を続けるようにと言ひ残し、鋼鉄製らしい一個の中空の玉をX氏に渡しました。その中には三十個の小さな白い玉があり、これは一日に一個ずつ飲むためのカプセルなの

であって、これを飲めば治るのでしょうか。

実際ライスは治りました。そしてX氏は二人の男たちに誓った約束通り、この件を洩らしはしませんでした。

十二月になって、私が出た数日前にライスは医師のところへ行きましたが、医師はすでにガンが消えていることを確証しました。

私はその家を出ましたが、この事件については完全に秘密を守ることを約束しました。しかし私はあなたにお話します。この秘密は守って下さい。もしこの事件があなたの記事で伝えられてもべつに影響はありません。関係者の名前を洩らしてはいけません。しかし誓いますが、すべては実際に起こったことです。私の可愛いライスは腹がガンで死ぬことが宣告されていて、殆ど最後が近づいたときに腹中電燈のような器具で救われたのです。この器具が放射線を放ってガンを取り除き、彼女は癒されたのです。しかもあの「男たち」は私たちがこの人々を恐れる必要はないことを示すために、地球の人々にたいしてこの種の多くの物事を言っているのです。

彼らはライスを救いました。そしてその夜円盤へ帰って行き、永久に去ってしまいました。

はつきり申しますと、彼らは火星から来たのです。しかもマグネシウムを探しに来るのです。彼らの惑星ではそれを精製して建造物やいわゆる空飛ぶ円盤用に用いるのです。

彼らは地球人と戦うつもりはありません。このことはX氏が家族に話しているのを聞いて知ったのです。どうか私をつらい立場に置かないようにして下さい。あなたがこの事件のことを書いて

も、アナズイア・マリヤからそのことを聞いたとは決して書かないで下さい。

私は悪者になりたくありませんし、元の主人をつらい立場に置きたくありません。ただあなたの円盤問題調査活動のお手伝いをするために話すのです。

私の住所を記さないことをお許し下さい。私はリオの郊外地区に住んでいます。私は正直でまじめですが、元の主人のためを思って記者の訪問を望みません。

読んでいただいております。

アナズイア・マリヤ

右の手紙の主は明らかに教養の低い人であるが、それにもかかわらずこの手紙は生き生きしている。原文のポルトガル語の拙劣な用法にもかかわらず、本人は事件を実にうまく述べているので、われわれが現場にいたかの如く実景を髣髴させるものがある。私の意見では、この手紙は或る感動をもって書かれたのである。つまり現実が起こったと思われる物事に關する感動なのだ。

またきわめて興味ある技術的な事柄の説明がある。たとえば少女の肉体内のすべてを見せた青白い光（エックス線の進歩したものの）。懐中電燈に似た器具。これはどうやらガン細胞を殺すことのできる何かの放射線を放っていた（コバルト放射療法）の進歩したものか？。また治療を完全にするための化学療法。これも意味をなすものだ。別な興味の対象は対面中のテレパシーである。また黄赤色の長い髪をして中国人のようにつり上がった明るい眼付の背の低い乗員たちに関する記述もある。その眼付は他のコン

タクト例にいやというほどしばしば出てくる。

しかし私はテレパシーを含む部分のためにこの陳述の大部分を受けつけないことにした。私はテレパシーの部分信じない。というのはそれより十五日前の一九五七年十月十日の夜発生した別なコンタクト例（これも私のとっときの情報）にかんがみて前記の体験記を拒絶したのである。ここにその一部分だけを紹介しよう。

「すると物体の中でドアが自動的に開いた。そして二人の間が現われた。続いて更に二人、また二人、最後に七人目が出て来て、他の者たちが形成したグループのあいだを通り抜けた。彼らは三分間トラックを見つめた。これが全部の人数である。この人々はすべて地球人に似ているが、背は低く、肩まで長髪をたらし、衣服は胸のところが光っていた。『この小人たちが私を見ていたとき私はトランス（恍惚状態）におちいり、相手が自分たちは平和な使命のもとに来るのだと言っているような奇妙な感じがありました。』」

手術の例が全然含まれていなかったにせよ、同じ時期に乗員や衣服やテレパシー等に関して似たような内容を持つ別な事件との偶然の一致はおだやかではない。私は右の二件を将来の参考用に特別ファイルに入れることにした。『手術』の件にたいする興味はまだ消えてはいない。リオに住む医師として、やはり私は、不可解な方法で胃ガンの治った人に関して患者や他の医師たちから何かの手がかりを得ようと思っている。

ヴァレンソルの着陸事件

エメ・ミシエル
チャールズ・ボウエン

エメ・ミシエルはフランスの名高いUFO研究者。チャールズ・ボウエンは英国の「フライイングソーサー・レヴュー」誌編集長。この記事は二人の現地調査記録である。(編者)

〔事件の概略〕

一九六五年六月中の数日にわたる毎朝、フランスはバスザルブ県ヴァレンソル村のラヴェンダー(注)シソ科の常緑亜低木。花は淡紫色でかおりがよく、穂になって咲く。乾燥させて衣類の中に入れたり香水の原料にする)栽培者モーリス・マス氏とその父は、「リヴォル」と名づけた彼らの畑で何者かが植物の若枝をつみ取っているのを発見して憤りの念が高まってきた。七月一日の朝五時四十五分頃に、モーリス・マスは畑で仕事を始める前の一服を終わろうとしていた。彼は畑のそばの小さなブドー畑の端にある小石などを積み上げた小高い山の近くに立っていた。突然ヒューッという音が聞こえるので、ヘリコプターでも来たのかと小山のまわりを見まわすと、ドフィンヌ車くらしいの大きさのラグビー用ボールのような形をした一個の「機械」が、中心の軸を地面にめり込ませ、六本脚で停止しているのを見たのである。しかもその物体の近くに「八才くらい」の二人の少年が一本のラヴェンダーのそばにしゃがみこんでい

るのだ。怒ったマスはブドー畑を通過してこっそり近づくと、その人間たちは全然少年でないことがわかった。彼は隠れ場所から出て二人の方へ接近した。五メートル以内に来たとき、一人がふり向いてエンピツ型の器具を彼の方へ向けた。するとマスは途中で動けなくなつて立ち止まったのである(エメ・ミシエルはマスが一種の催眠術的暗示にかかつて動けなくなったのだと言っている)。マスの証言によるとその人間たちは背が四フィート以下で、からだにびったりした薄緑色の服を着ていたが、頭巾はかぶっていない。カポチャのような頭、肉づきのよいほお、つり上がった大きな眼、くちびるのない口、おそろしくとがったアゴ。からだのまん中からゴロゴロという音をたてていた。マスはその遭遇のあいだに起こった事柄をどうしても明らかにしない。しばらくしてから相手は「機械」の方へ引き返したという。脚が回転して引込むあいだ相手は内部からマスを注視しているのが見えた。中心軸のゴツンという音がすると機械は離陸して音もなく浮かび上がった。二十メートルも飛んでそれは見えなくなったが、マノスクの方向へ行った跡がラヴェンダー畑で約四百メートルにわたって発見された。

マスのからだの動きが回復したとき、気が転倒して恐れおののいた彼はヴァレンソルへ飛んで引き返した。その村のカフェ・ド・スポールの経営者が彼を見てその顔付に驚き、どうしたのかと尋ねた。マスは物語の一部をうっかり洩らしたので、経営者はじっとしておられず、ニュースがパッと広がった。これは当時ヨーロッパ盤研究界で大問題になった事件である。

*

*

われわれがプロヴァンス州の小さな村ヴァレンソル訪問を計画した頃には、すでに騒ぎや噂は静まって久しくなっていた。一九六五年七月一日の朝発生したラヴェンダー畑の驚くべき事件は忘れられていたようだった。しかしわれわれはやがて、マルリエンの痕跡にたいする官憲の反応はわれわれとは異なる見解を示していたことを思い出したのである（注II、マルリエンの痕跡）とは、一九六七年五月にフランスに発生したUFOの着陸跡と思われる不思議な穴が地面にできた事件。官憲はこれを落雷の跡とかたづけた）。

さて一九六五年にさかのぼることにしよう。目撃者—または犠牲者と呼びたければそう呼んでもよい—のモリス・マス氏は、田盤の乗員に出会った体験により、更にジャーナリスト、警官、その他の官憲、研究者や好事家などから受けた打撃により呆然自失の体であった。本人は事件のために耐えきれなくなったのだとか、カフェ・ド・スポールの主人にその奇怪な物語を全然洩らしはしなかったのだというような噂が流れていた。

われわれに関する限り、—ここでわれわれが冷酷な印象を与え、るとしても、決して故意にそうするのではない—ただ言えることは、本人が大変なショックを受けたがゆえにちょっとのあいだ感情も舌もコントロールできなかったことにわれわれは感謝しているのである。なぜならヴァレンソル事件はUFO史上最重要な事件の一つであるとわれわれは考えているからだ。ヴァレンソルという名しか知らぬ人のためにわれわれはこの事件の概要をくり返し発表してきたが、これは本稿の始めにも述べてある。

マス氏が苦しい体験以来どんな目に会ってきたかをわれわれは

しばしば考えたが、今年（一九六七年）前半にその地域から別な目撃報告が出たことを知ったとき、ヴァレンソル実地検証行がはつきりと示された。

【ミシエル】右の別な着陸事件から二ヵ月と七週後になる八月が最適ではないか。そのときはチャールズ・ボウエンとその家族が休暇でフランスへ行くことになっているので、好都合だ。

【ボウエン】八月二十一日の朝、エメ・ミシエルが運転して、アルプスの小道やすごい峡谷を通り（注IIマリタイム・アルプのことか？）、息のつまるようなスリルに満ちたドライブによって急速にディーニュに着いた。そこでエメの弟のギヌスタヴ・ミシエルとその娘のシルヴァーヌが一行に加わった。

ディーニュの南方、長い、ひどく曲がりくねった上り道を車で登って行くとヴァレンソルの台地に出た（注IIヴァレンソルという地名はリーダズ・ダイジェストの大地図にも出ておらず、どなたか不明だが、ディーニュ付近であるからカンヌやニースより五、六十キロ奥地と思われる）。正直に言うと、初めてこの台地を遠方から見たときに私の空想は破れてしまった。というのはそこは或る巨大な山の頂上が大変動で除かれたあとの土台のように見えるからだ。

【ミシエル】私は友の（ボウエンの）空想があまりにヴェリコフスキーに影響されたのではないかと心配した（注IIこの台地もシベリアのナゾの大爆発と同様に異星宇宙船の激突によって山が吹きとばされた跡ではないかと冗談半分にボウエンが言うのをからかったもの）。この台地は沖積期にできたもので、沖積土の巨大な堆積であり、後に谷（複数）によって刻み目をつけられ、その

ために周囲の地形が形成されたのである。

【ボウエン】私はミシエルの愛したフランス・アルプスにたいする地理学的知識に敬意を表するものである。この特殊な台地は周囲の谷から千フィート以上の高所にあり、その周囲を越えて地中海の方へアルプス山脈が消えてゆき始めるのである。

一度その台地に登ると眼のとどく限りの広漠たる平原をながめることができ、その大部分は一面に整然と並んだ無数のラヴェンダーで覆われている。その風景の単調さは、点在する家、小舎、教本のオリヴとオマケに添えてあるクワの木を含む一つの小さなブドー畑などによってわずかに救われている。ラヴェンダーの甘いかおりがあたり一帯に満ちていた。

【ミシエル】その台地は広大なもので、われわれは急速に前進したけれども、時間は充分にあつたので多くの物事を論じ合うことができた。特に私は、サンミシエル天文台の天文学者連が目撃し報告した或る異常な物体の事件について語った。われわれがヴァレンソルの村に到着したとき、台地の彼方の西方に時折見えた山々のなかの一つの割れ目に注意した。天文台があるのはこの山々のむこう側であるからだ。以下は私がチャールズに語った話である。

サンミシエル天文台の目撃事件

オリヴォル（マス氏の畑の名）の事件から三ヵ月後の一九六五年九月の終り頃、天文学者の友人が次の事実を私に知らせてくれた。

九月十七日から十八日にかけての夜、午前三時に、仕事を終えたばかりの三人の天文学者が新鮮な空気を吸おうとドームから外へ出た。夜空は晴れていたのと同様は遠近の村々の灯火よく見なれた光だが、を容易に見分けることができた。しかし東南東の方に山並の関係からきわめて正確にその方角を指すことができただが、正確に言えばエギーヌ村の南東に横たわっている海拔一五七メートルの峰の方向で、それよりもずっと低い、ヴァレンソル台地とちょうど同じ高さのところに、一同は大きな静止した卵型の黄赤色の光体を見たのである。十ないし十五分間それを見つめたが、その位置や外観に変化は見られないし、燃える炎のようにちらちらすることも無い。自身の光を放つ固体と同様な状態だ。三人の天文学者は何だろうといぶかったが、何かが起こるまでとどまっていようと言う者もなく、不安になってきたので、みなはその場を離れて寝た。

私はヴァレンソル憲兵隊に、問題の夜かまたは九月十七日夜の前後の別な夜に何か飛んだかどうかと慎重な質問を試みた。（目撃時にすぐメモを取らなかつた天文学者たちが、ひよっとして日付を一、二日間違えたかもしれないと思って、九月十七日夜の前後と尋ねたのである）火事か夜間の大火災かそれに類似したものがあつたかと憲兵に尋ねたところ、そんなものはなく、台地のどこにも何も起こらなかつたという。

そこで私は、バリの高等師範学校がヴァレンソルに設置している研究所で或る仕事を受け持っている物理学者の友人にこの件について話してみた。するとこの友人は次のような興味ある事実を語ってくれた。電離層の或る現象を研究しているこの研究所は、

一連の鉄塔の頂上に百メートルにわたって一直線に伸びた空中線を張っているが、この各鉄塔の頂上がときどき燈火で照らされることになっている。たぶん天文学者達は遠近画法で描いたような燈火のつらなりを見ているかもしれないとも言う（この各鉄塔は天文台のある方向にたいして斜めに並んでいるからだ）。そこで研究所へ電話をかけてみると、各鉄塔の頂上の燈火は問題の火の玉の見えた期間中に点燈されていないことがわかった。

しかしこの可能性を完全になくすために二種の実験が行なわれた。よく晴れた夜間にこの燈火が五分間点燈され、次に五分間消される。これを何度もくり返すのである。また別な見通しのよい夜に燈火が三十分間続けて点燈されることにした。ところがこの実験のいずれも、高倍率の双眼鏡を使用してさえも、燈火はチラリとも見えなかった。

この二つの実験でわかったのは、高等師範学校のヴァレンソル研究所は天文台から見えないということである。とにかくその事実はヴァレンソル台地を横切ってみれば容易にわかることで、天文台のドーム（ヨーロッパ最大のドームで銀白色）が見えるのはデュランス川右岸のヴォルクス岩山のあいだの非常にせまい地帯からだけである。リヴォル畑はまさにこの地帯のまん中にあるのだ。

もし天文学者たちが一九六五年七月一日の朝、双眼鏡でこの方向をながめたとすれば、今やわれわれになじみ深いマス氏の体験の全景を二十キロの彼方に見ることができたであろう。そうすればおそろくわれわれは事件の全貌をもっと詳細に知ることができたであろう。

目的地へ着く

「ボウエン」サンミシエル天文台の目撃事件の話がはずんでわれわれは台地のそばにある長い直線道路の端近くまで来てしまった。急にその道路は長いカーブとなって、車は典型的なプロヴァンス地方の村へ入って行った。ヴァレンソルに着いたのだ。燃える日光のために歓迎するようなカゲを投げた木々の並んだ大通りを見て私はうれしかった。

退職した元巡査部長のギユスタヴ・ミシエル氏は憲兵隊へ直行した。彼はそこでよく知られている人物だ。みんなはマス氏の居所を知りたがっていた。

マス氏は憲兵隊によく知られているばかりでなく、憲兵たちからよく尊敬されていることもわかった。冗談の言い合いはなく、憲兵の話ではマス氏は多忙な人で、今時分の季節では特にそうだとのこと。ラヴェンダー香水の製造所へ行けば氏がいるだろうという。この製造所は他の三人の農民との共同経営になるものである。

われわれは村の南端から半キロばかり前進してやがて製造所へ着いた。彼はそこにいなかったが数分すれば帰って来るというので、共同経営者の一人や労働者たちに話しかけながら時をすごした。彼らはマス氏のまじめさに疑いをいだいてはいなかった。われわれはその他に一つ二つの興味ある物事を知ったが、そうこうするうちに彼の車が村からやって来るのが見えた。

正直に言うと、このときの会話には私の理解しがたいプロヴァ

ンスなまりがときどき出てくるので、そのあとの討論の説明はあっさり友にまかせることにする。ミシエルは一九六五年に行なったこの目撃者との最初の会見について言うことが少しあるのだ。

一九六五年八月の尋問

【ミシエル】私は一九六五年八月八日以来マス氏に会わなかった。ただしヴァレンソルの住民その他多数の人が、マス氏の言動についてすべてを私に知らせ続けていた。私は今度の会見で以前と全く変わらない彼を見出した。つまり個性について言えば静かで忍耐強い人である。しかし一方、あの不思議な事件にたいする態度に完全な変化があるのに気がついた。一九六五年には気がかりでいらいらしているように見えたとし、二度の機会にわたって心痛しているように見え思われた。その最初の心痛は「両手が震えているのさえ見えたが」私が彼の時計の近くでコンパスをあちこちと動かしているときだった。彼はコンパスの針の動きを見ていた。「それで」私はどうだといふのかね?」と彼は叫んだ。「私も何かの影響を受けてはいないかね?」放射線か何かか——

彼がわれを忘れた二度目は、私と弟の二人で行なった質問の終り頃だった。当時チャールズ・ボウエンやゴードン・クレイトンを含む少数の人に伝えただけで公表を差控えた或る事件に関する質問である。一九六五年ヴァレンソルへ行く前に、私は前もってソコロ事件（注）米国の有名なりPO目撃事件。本誌に掲載済）の徹底的研究をしようと思ひ、入手し得る限りの資料すべてを貸してくれと友人たちに頼んだ。すると受け取った書類のあいだに、

ソコロの物体を見たロニー・ザモラの証言に基づいて作られた模型を写した一枚のカラー写真があった。マス氏が私に伝えようとした事件のすべてを私は氏から聞いたとすっかり確信したとき、書類カバンからその写真を取り出して氏に見せた。

すると彼の顔に奇怪な反応があらわれた。まるで自分の死にぞまを見たかのように息をつまらせたらしいのだ。

最初彼はだれかが自分の見た物体を写真に撮ったのかと思った。これが米国で警官の目撃したものだとはわかるやホッとした様子で次のように言う。

「そうすると私が夢を見たのでもなければ気違いでもないことがわかるでしょう」

もっと一般的な意味で言うと、一九六五年にはマス氏は自分の体験について心配や不安な様子を見せていた。たしかに彼は次のように断言した。「あの小人たちは悪者ではなかった」「こちらへ何の危害も加えようとはしなかった」だが彼自身に関する限り事件の結果については少しも心中が静まらなかったのだ。加うるに彼は精神的に心の落着きを失っていた。つまりその不思議な体験は明らかに単調な田舎者の生活に調和できなかったのである。

一九六七年度の会話

だが一九六七年にはわれわれは彼の平静さに驚いた。そして人々の想念や感情を探り出すことに慣れていると称する弟のギェヌタグが、マス氏の最初の態度よりも今度の新しい態度のほうにはるかに感心したと言明したのは注目にあたいする。最初の態度は

たしかに正直で利口な農夫のそれであったが、今度は心理学上のテストにかかりやすいどこかの正直な利口な農夫と全然異なるところはなかった。今やマス氏の内部には確信が根をはやしており、チャールズ・ボウエンや私自身の如き徹底的に問題を調べた人々が本人に言うかもしれない言葉についてもは何の好奇心も示さない人となっている。

以下は彼との会話の概要である。概要というのは、とりとめない会話は冗漫であり、同じことのくり返しであって、「まあそのとおりだ」というような言葉や遠まわしな言い方の頻発で、このすべてについては内容を少しも失うことなしにうんと縮小することができ、私はただ冗漫な部分を縮小したという意味である。弟と私はまず再会の挨拶で話を切り出し、続いてその年の干ばつやラヴェンダーのでき工合などの平凡ないんぎんな話を持ち出した。続いてチャールズ・ボウエンを紹介した。

それからマス氏に言った。「あなたはすべてを語ってくれなかったという印象をいつも持っているのだが—」

「それはほんとうです。私は全部を話さなかった。しかしいつもしゃべりすぎた。すべてを内緒にしていたらもっとよかつたらうと思うんだ」

「そう。だがそうはいうものの、重大なことなんです。ね、知りたがっている人が無数にいるんだ。そうした人々を喜ばせることが必要です。始めたからには最後までやり通すことですな。これ以上心中に何も残さないようにね」

「そうだ。大変重要なことなんだが、何も説明できないんだ。私にできることといえば、理解してもらえそうにない事柄を話す

だけでしょ。あんなに理解しようと思えば自分で体験しなくちゃだめですよ」

「どういう事を知ってるの？ ちょっと話してごらん」

「^{マソニー}だんな、私があんたに話さなかった事はだれにも話してはいないし、女房にも話してはいませんよ。だれだって私にしゃべらせることはできないでしょう。しつこいですぜ。もうその話はやめましょうや」

この会話はすべてマス氏のラヴェンダー製造所で行なわれたので相手は言い足した。「よろしかったらおいでなさい。こちらのだんな（ボウエン）をオリヴォル畑へ案内しましょう」

そこでわれわれは車に乗り込んで彼のあとに従った。

着陸現場

【ボウエン】多忙な人のわりにマス氏はこころよく多くの時間をさいてくれた。彼は村を通って元の道へ逆もどりし、台地へ登って行き、そこで大通りからそれて汚ない脇道へ入って行った。ヴァレンソルから約一キロの所で一同はオリヴォルという畑の端の小さな無人小屋のそばに車をとめた。

ここですぐに感じたのはこの場所がとにかく広いことだ。オリヴォル畑は小さな一部分にすぎず、広漠たる平地のちっぽけな一区画にすぎない。だがまもなく私は過去の記事やスケッチ類から思い出した特徴に気づき始めた。たとえばコリーヌ・ド・カユ、つまり小石やがらくたを積み上げた小山付きのブドー園がある。率直に言って私はそのブドー園に少々失望した。というのは、私

はマス氏がこっそりと獲物（小人）に近づいて行った大農園を想像していたからだ。私が見たブドー園のブドーのつるならば、マス氏くらいの身長の人が隠れるのは困難だろう。このブドー畑の中にいけば、彼が接近して来るのは容易にわかるというものだ。次に私が気づいた点は、実際の着陸現場はブドー畑の最短地点からクリケットの有効打球距離の長さ（注Ⅱ両チームの三柱門間の距離、約二十メートル）以上であったことだ。いうなれば、それはほぼ二十五ヤード彼方であり、もしマス氏が主張するように氏が例の「人間」たちによって停止させられる前に相手から五メートル以内に来ていたとすれば、氏は十五ないし二十ヤード前進したことになる。

私は確信をもって以上のことが言える。実際の着陸場所は、そこを見た人ならだれでもまだはつきりわかるからだ。そこはラヴェンダーがきちんと並んでいる畑のどまん中の円形の土地であって、雑草がまばらに生えている以外に何も無い。径は約三ヤードで、周辺には沢山のラヴェンダーが発育を阻止され枯れている。それらはたしかに他のラヴェンダーのように健康ではない。

もはや物体によって残された痕跡はなかった。マス氏の話では、その場所をのちにまた耕して植えつけをしたとのことだが、新しい苗木はみな枯れたという。エメ・ミシエルの説明によると、このまばらな雑草というのはトライフォウリアム・メリロウタス（注Ⅱクローバに似たマメ科の植物）だとのことだ。

われわれが車をそばに置いた例の無人小屋は、かつて別に出した記事で言及したかどうか思い出せない一つの参考物である。再度言おうと、小石やガラクタの小山―そのうしろでマス氏が宿命的

な朝、トラクターのそばで一服吸ったのだが―は、私が想像したよりもブドー畑の端にうんと近かった。

着陸地点から小さな無人小屋を見ると南西に向かうことになる。マス氏の話では例の物体は西方へ向かって離陸したそうだが、それはマノスクの方角である。その方向には小さな木造小屋があり、それ以外には土地が広がっているだけだ。だからマス氏の言の如くに物体が次第に消えて行ったのでなくて、かりにアッという間に飛んで行ったとしてもその姿は見えなちがいない。フランスを知らない英国の読者は、フランスの畑は英国人になじみ深い畑と違って生垣で囲むことをめつたにしない事実に気づかぬだろう。畑の境界はアゼまたは低い針金の垣で囲むのである。これは当然広いという感じを高めることになる。しかもヴァレンソル台地に立てば広漠たる平野のなかにあって果てしなく視界が開けるのだ。私が記録用に数枚の写真を撮っていたあいだ、エメ・ミシエルはマス氏と別なおもしろい話をし合っていた。また彼が畑の設計や面積に少なからず驚いていることもわかった。

説明された、誤り

【ミシエル】目的地に到着し、現場を見て、私とその日のうちで最大の驚きを感じたのは、ブドー園が私が記憶していた（または記憶していると思った）のとはまるで違っていたことである。それは、フライイング・ソーサー・レヴェュー誌一九六五年十一月・十二月号に書いた記事中のスケッチで示したよりも、着陸地点から少なくとも四倍も離れていた。この不可解な誤りの原因を

発見するまでに数週間メモをくっては考える必要があった。ここにそのメモの一つがある。おわかりだろうが重要なものだ。

一九六五年八月に私は何より先にディーニュ憲兵隊のヴァルネ隊長を尋ねた。そこで最初の調査報告を読んだが、それと一緒に写真付きの詳細な見取図があった。するとヴァルネは、オリヴァ副官から元氣づけられたマスは物体とその乗員たちへかなり接近したことを認めたのだと教えてくれた。

ディーニュにいたあいだに私は現場の見取図のコピーを作り、それからヴァレンソルへ行ったが、マスがいなかったのでオリヴァの説明を聞いて調査に乗り出したのである。その後われわれはラヴェンダー製造所へ行き、オリヴァと私の弟のギユスタヴの面前でこれまで聞いたような話をマスがしてくれたのだ。そのあとマスの父親がオリヴォル畑へ私を案内してくれて、午後になってまた製造所へ帰り、マス氏に少し追加質問をした。

ヴァレンソルから車で約三時間かかる自宅へ帰ってから、ベッドへ入り、二日間気分が悪くて寝ていた。この短い激しい病氣（高熱）は私には不可解だったが、その特別な意味を考え出すほどの基盤はない。その後私の調査記事を整理し始めたとき、困ったことにヴァルネ隊長の事務所で作った現場の小見取図を失ったことがわかったが、メモ類を読んで、私の記憶は全然自分をあざむいていないことを知り、記憶に基づいて再度見取図が作れるだろうと考えた。ところがどっこいこの見取図は誤っていたのだ。なぜか？ 説明は次のとおりだ。

マス氏がきわめて慎重に詳細に「ブドー畑を越えて、物体とその乗員に接近した様子を語ったとき、その広い土地で相手に警戒

されることなしにそれほど接近することはできなかったろうという推理を私は無意識に働かせたのである。その結果、物体から数メートルばかりでブドー畑にとどくという考えが心中に根ざしたことに気づかなかったのだ。この漠然とした推理は正しかった。チャールズと私は現場でそのことを立証することができた。たしかにブドー畑から飛び出て、こちらの姿を見られないようにして着陸場所から数メートルまで接近するのは完全に不可能である。

しかしこのことは事件のより深い解釈全体を変えるのである。マス氏が近づくに相手に気づかなかった十五メートルに及んだというその時間中に、相手二人が動かないでそこにうずくまっていたとすれば、事件全体があらかじめ相手方によって計画されたことを意味することになる。この部分は最も重要であって、六月の、事件前の数夜にわたってオリヴォル農園で行なわれた略奪は、実際にはマス氏の好奇心と警戒心とをひき起こすために計画されたのだ。（ミシェル注）一九六七年のヴァレンソルの春は寒くて空気が乾燥し、夏は特に乾燥した。毎年刈り取るつる草はそのために殆ど伸びず、まばらであった。一九六五年には高く茂り、容易に人が隠れることができた）

マス氏との最後の会話

しかし六七年の話にもどることにしよう。オリヴォル畑でわれわれはもう一度話をしてくれとマス氏に頼んだ。彼は話したが、何ら新しい事柄はなかった。もっとくわしく話すようにと言いたい気持で、私は彼の知らないとル夫妻の話をして聞かせる。彼は

それを聞く。見たところ興味はなさそうだ。そして次のように言う。

「その夫婦が相手から強制されたと言っているのなら、それはほんとうじゃないな」

「なぜ？」と少々驚いて私は尋ねた。

「相手はだれにも強制しないんだ。その夫婦が『いやだ』とか『そんなことをしたくない』などと言えば、相手側は何もしなかっただろう」

「なぜそのことで確信するのかね？」私は尋ねた。

「知っているからですよ」

「どんなふう知っているの？」

「あなたに言ったように事件についてはこれ以上言えないんだ。死ぬまでしゃべりはしない。しつこいですな、あなたは。だが私があのアメリカ人たちについてこんな言い方をするとすれば、それはしゃべってならないという理由を知っているからだ」

このとき、あらゆるUFO研究者に興味あると思われる一事件が起こったのだ。で私はマス氏に、「相手」がだれにも強制はしないということを断言できるほどに「相手」を知っているのかと尋ねたら、氏は次のように答えた。

「私が相手を知っているというのではない。だが確信できる事がある。たとえば相手がいつやって来るかがわかるんだ」

「それはどういう意味かね？」私は聞いた。

「つまりこうだ。数度ばかり私の内部の何か私に語りかけたことがあるんだ。『相手は近づいている』とね。すると実際に空中に何かが見えたり、後になって何かが起こったことを新聞で知

ったりする。たとえば昨年七月十七日から十八日にかけてのあの有名な夜、私は戸外で眠っていた（ミシェル注）噂によるとその夜人工衛星ウォストークが西ヨーロッパ上空で分解したといわれるが、あり得ることにしても、事件のすべてを説明するとは言えない。突然、彼らが出現しようとしているという感じがして目が覚めたので、空を見始めて、二十分後に物体が通過するのが見えた。こんなことが二、三度あったんだ」

以上の話で興味をそらされた私は、なおも彼から詳細を聞き出そうとしたがだめだった。マス氏は自分にとって興味のない話をメモしたり記憶したりしない。だからわれわれの科学的好奇心は彼の興味を起こさない。具体的な詳細な話も彼には通用しないらしい。彼にとって本質的に重要だと思われるのは、あの人間たちと地上の人々とのあいだに存在する精神的関係である。だが彼の内部にはむしろ宗教的概念の如くにこの関係が感じられるのである。

七月十七日から十八日にかけての夜に関して言えば、マス氏の前記の予感、それが実際にウォストークであったことが結局証明されたならば、全く特別な興味を起こさせることになる。われわれはそれに関してさまざまな憶測をすることができ、すべては、その憶測が証明できないのが魅惑的であるのと同じほどに魅惑的である。

遠くのドーム

【ボウエン】マス氏は別れを告げて仕事に帰って行った。われ

われは写真を撮りながらぶらつきまわった。突然エメが私を呼んで西北西の方を指さした。遠く、台地の端のはるか彼方に山のつらなりが見えた。あまり高くはない。大体に四千ないし五千フィートの隊列である。峰のなかの或る場所にせまい割れ目があって、そのあいだから双眼鏡なしで数個の白い等間隔に並んだ点を見ることができた。これが有名なサンシエル天文台のドームだ。オリヴァル農園から少し動けばドームが見えなくなることがすぐわかった。

奇妙な人間に関する報告

私は自分の写真の一枚に見られる例の無人小屋に興味をそそられて、これはG.E.P.M.の機関誌「フェノメヌ・スパシヤオ（空間の現象）」にルネ・フリーエレが書いた記事と関係のある物ではないかと考え込んだ。

この記事中に彼らのメンバーの一人、フランソワ・ペイレニーという人が、一九六七年の始めヴァレンソルを訪れたとある。彼はその台地を「惑星間機動演習用の広大な基地」のように見えたと述べている。

ペイレニー氏が発見した最も興味ある情報の一つは、一九六七年一月の終りに五名の田舎者が、修理中の一軒の古い農家の空室中に一人の小さな人間がいるのを見つけたというニューズである。この小人はマス氏の「人間」と同じものだと報導されたが、ただこの小人はヒゲが生えていた。みんなはこの小人を捕えようとして大騒ぎを演じたがだめだった。「というのは不可視な

力のようなものによって小人はみんなの手をすりりと抜けたからである」そして窓から逃げてしまった。なおも追跡したけれどもむだであった。

ペイレニー氏によれば、この五名の証人は人に知られることを極力いやがったという。また氏は、同地区の他の住民が同じような途方もない体験を持っていることがわかって自分も自分も驚かすいと述べ、そっとしておくほうがよいと言っている。

われわれがヴァレンソルを訪れているあいだ、だれもこの話をエメ・ミシエルや私に話してくれた人はいない。しかもわれわれにはそれを追求する時間が殆どなかった。ところが記録する必要があるのである。われわれはその話をマス氏が製造所へ現われるのを待っているあいだに聞いたのだ。

【ミシエル】今チャールズ・ボウエンが述べたように、彼とギエスタヴと私が製造所へ到着したとき、マス氏はまだそこにいなかった。五、六人の人々が機械のまわりで忙しそうにしていた。われわれはマス氏の人柄について労働者たちに話しかける機会をとらえたが、彼らの話によると、マス氏は尊敬されている人物で、その誠意をだれも疑わないということだった。

過去の事件

い合わせた工員の一人が話すところによると、その工員が子供であった頃、二人の老農夫が或る夜一個の光る赤い卵型の物体が空から降下して、地上に静かに停止し、約十五分間とどまった後、

再び空中に上昇して消えるのを見たと話したという。その老農夫が死んでから久しい。この事は第一次大戦前に起こった（ポウエン注）工員はたしか一九一三年と言ったように思う。それが着陸した場所はオリヴォル農園のすぐ隣りであった。

そうこうするうちにマス氏が製造所へやって来たので、われわれはオリヴォルへ行くためにその工員と別れたが、あとでまた引き返して質問しようとみんなで話し合った。しかし引き返してみると彼は仕事を終えて帰ったということで、居所を教えてください人はいなかった。私はいづれまたヴァレンソルへ旅したときにこの話についてもっと詳細な情報が集まることを望んでいる。

チャールズ・ポウエン氏から編者久保田宛の手紙の一部（一九六七年二月二日付）

あなたのグループ「日本GAP」の生長ぶりを知ってうれしく思います。それが発展し続けることを祈ります。またあなたが現在、この複雑なUFO問題にきわめて広い視野を開いていることを知って、心から喜んでいきます。

「フライイング・ソーサー・レヴェー」誌の記事を資料に用いることは差支えありませんから、せいぜいご利用の上、レヴェー誌の宣伝をして下さい。あなたの会員で英語の達者な方々が同誌を購読されることを願っています。

下の写真は着陸現場に立つモーリス・マス氏。後方の植物がラヴェンダー。



ようとして大騒ぎを演じたがだめだった。「というのは不可視な

空から降下して、地上に静かに停止し、約十五分間とどまった後、

GAP シリーズ No. 3

近刊！予約受付中

死と空間を超えて

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎訳

A5判/200ページ
500円・≒75円

- ◇ジョージ・アダムスキーがFLYING SAUCERS FAREWELL (邦訳「空飛ぶ円盤の真相」)執筆後1965年4月に他界するまで定期的に発表し続けた論説のうち本誌に掲載したものすべてをあらためて一冊に収録した貴重な書。
- ◇金星旅行記、土星旅行記を含む数十篇の論文以外に編者宛の未発表書簡多数を掲載。アダムスキー直接執筆の文献邦訳版としてはこれが最後。
- ◇編集に際しては訳文を更訂して発表年代順に集録。本格的活版印刷(タイプ印刷にあらず)、本文8ポ、上質紙使用。
- ◇4月末刊行予定。少部数限定版につき早目にご予約のほどを。なるべく振替をご利用下さい。(久保田八郎個人宛) 2冊入手して1冊を知人に贈るもよく2冊以上5冊までの一括注文は小包便となり第1地帯で送料120円、第2地帯で160円、第3地帯で230円となる。

— 日本GAP —

— 編集後記 —

◎本号は二月中に発行予定のところ一カ月遅れました。やむを得ぬ事情あったので、ご了承下さい。そのかわりに四頁ふやして三六頁としました。タイプライターの調子が悪くて字が不揃いのため読みづらいことと思いますが、次号までには大巾に修理します。

◎「予言」は本号で完了しますが、この中に第三次大戦の発生に言及した箇所があるのを見て狼狽してはいけません。これはあくまでも予言であって「予定」ではありません。一つのインフォルメーション(知識・情報)として冷静に判断されることを望みます。

◎「ジョージ・アダムスキーの思い出」はC・A・ハニー氏の情報誌に掲載されたもので、貴重な証言です。ルウ・ツインシュエタ1ク女史はヨーロッパきっての女流UFO研究者として名高く、ア氏のよき協力者でもありました。一昨年夏に編者がパーゼルのシンフォニア出版社発行のギター楽譜(パガニーニのイ長大奏鳴曲)の購入心配方をルウに依頼したところ、折から休暇で南スイスに滞在中だったのを切り上げて急遽パーゼルへ帰り、右の楽譜を入手して送ってくれた親切さにいたく恐縮したことがあります。

◎「空想か真実か」はフライング・ソーサー・レヴェット誌一九六七年第四号、「ウォーミンスタアの調査報告」と、円盤の乗員に救われた瀕死の少女」は同年第五号、「ヴァレンソルの着陸事件」は六八年第一号に掲載された記事のそれぞれ全訳です。外国ものばかりでなく国内のUFO騒ぎも発生すれば載せますが、どうもめばしい情報が入りません。

◎昨年マラヤへ旅行された九大の塩谷博士から現地新聞キナバル・タイムズの切抜きをいただきましたが、それには昨年十月に英

国で円盤の目撃事件が起こり、それが下院での質問戦にまで展開したとあります。保守的といわれる英国人が意外にUFOに関心をもち、英国に相当数の円盤研究団体があることを思えば、日本とはかなり様子が違うようです。

◎昨年十二月に元アダムスキー秘書であったルーシー・マクギニスから久方ぶりの音信あり、それによると長いあいだ東洋哲学を研究していたとのことで、またオーソン（同乗記に出てくる金星人）とその一行は地球人が自分自身を知るようになることを指導しようとするらしいということです。

◎米国ニューヨーク州ロチェスター在のウィリアム・シャーウッド氏からたびたび連絡がありますが、この人はかつて地元の新聞に「勇気ある人アダムスキー」と題する一文を出した人で（本誌に掲載済）、各地で講演を行なって歩く「勇気ある人」です。この人によると、米国にはアダムスキー支持者が多数いるのであって、必ずしも一方的に無視されているのではないそうです。

◎その他海外から多数の資料・連絡等が来ますが、本誌に載せるのはその中のほんの一部分にすぎません。

◎物価高騰のため本号より頒価を一五〇円とします。

◎本誌は目下次のものが各少数残っています。第32、33、34、35号。各一三〇円、送料三五円。一括ご注文の場合は送料不要。

◎GAPシリーズの『生命の科学』、宇宙哲学は、まだ在庫あります。

◎海外のUFO専門誌で推せんしたいのは(1)英国の『フライイング・ソーサー・レビュー』誌、(2)米国の『サイエンス・パブリケーションズ・ニューズレター』誌、(3)デンマークの『UFOコンタクト』誌ですが、これらの注文方法については、あらためて編者宛ご照会下さい。右のいずれも高度な英文で書かれてありますから生半可な語学力ではだめです。

◎日本GAP副機関誌「宇宙同好通信」の申込先や東京における

月例会の詳細については本誌第35号の「編集後記」をごらん下さい。特に例会ではUFO写真のスライド映写も行なっています。◎編者は資料撮影用として中古の旧式二眼レフカメラを求めています。レンズがテッサータイプならよろしく、トリオタタイプは不可です。できればミノルタオートコードがよいのですが、とにかく手放し希望の方は品名、程度、仕様、価格等をお知らせ下さい。

◎編者宅へ来訪される方はあらかじめ当方の都合をたしかめた上で計画して下さい。一方的な押しかけ来訪は絶対に不可です。大体当方は連日多忙で、日曜・祭日等の休日は特に研究活動のため大切な日ですから、このような日にゆっくりにお会いできる余裕は殆どないことをお含みおき下さい。第一、編者にお会いになっても何てこともないでしょう。

◎討論も大切ですが最重要なのは個人のテレパシクな感受力の開発訓練であって、自己を超高感度の受信機に仕立て上げることがわれわれの最大の課題であると思われまます。これは語学の習得と同様に「努力」よりも方法如何にかかっているような気がしません。研究体験者のリポートを望んでいます。(久)

昭和43年 3月15日 発行	日本GAP ニューズレター 1968 第三六号
不定期刊	翻訳編集発行人 久保田八郎
	発行所 日本GAP
	島根県益田市益田古川 振替・松江 二六三〇 (久保田八郎個人名義)
	頒価一五〇円・送料三五円 禁無断転載